

# 修士論文

## 日本庭園における曲水流觴の受容と変化

岩手大学大学院教育学研究科  
修士課程教科教育専攻国語教育コース

劉 鳳吟

2016年9月

## 目 次

1. はじめに	1
1.1 研究背景	1
1.1.1 水文化	1
1.1.2 曲水路遺構の報告	1
1.2 研究目的	2
1.3 研究史	2
2. 古代中国における曲水流觴	4
2.1 曲水流觴の起源	4
2.2 自然形水路	5
2.3 切石流杯渠の位置づけ	9
3. 日本庭園における曲水流觴の受容と変化	22
3.1 曲水流觴に関する資料	22
3.2 日本における曲水流觴の起源	23
3.3 奈良時代の平城宮東院庭園蛇行溝	26
3.4 平安時代の曲水と遣水一毛越寺を例として	35
4. 酒船石遺跡と曲水流觴	54
5. おわりに	60
5.1 まとめ	60
5.2 今後の課題	62
謝辞	64
参考文献	65

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

#### 1.1.1 水文化

中国から始まった曲水流觴は日本に伝わった。日本文化は水文化でもある。国土庁によれば、「水文化」とは「日常の生活における人と水のかかわり方。水に関する祭事や信仰、水（自然）を愛でる精神土壌、さらには水車、伝統的な漁法、川遊び等、有形、無形のさまざまな文化や伝統だけでなく、人々が水の持つさまざまな機能を利用しようとする努力なども、広い意味での水文化としてとらえることができる」という<sup>(1)</sup>。近年、都市化の発展に伴い、人口も大都市圏へ集中しつつある。都市における河川空間は、自然に触れられる貴重なオープンスペースの一つだと認められた。曲水流觴は現代盛んに話題にされている親水(水に親しみ)イベントの古代手法であろう。

#### 1.1.2 曲水路遺構の報告

東アジアにおける、中国、朝鮮半島、日本のそれぞれには曲水流觴に用いられる曲水路遺構と史料が残ると推定されている。高瀬要一氏の研究によれば、曲水は「自然系」と「石溝系」と2つの種類に分けられる。前者は玉石などを用いた自然的な水路もしくは池であり、後者は切石を用いた人工的な流杯渠である。

奈良文化財研究所の『古代庭園研究Ⅰ』は以下のように指摘している。

中国に残る曲水遺構は切石流杯渠5基(A. D. 11~18)、史料として確認できるのが2件(A. D. 11 および(A. D. 17)、自然形水路を用いた曲水流觴の様子を描いた絵画史料が1件((A. D. 15 以前~)である。

韓国においては、慶州市、鮑石亭の切石流杯渠遺構1基((A. D. 10)がある。

日本では7世紀の玉石組曲水路が1基(古宮遺跡)、8世紀の玉石組曲水路が2基(いずれも平城宮東院庭園)、同じく8世紀の屈曲する平面形の池が1基(宮跡庭園)、平安時代の遣水遺構が7基(A. D. 9~12)報告されている。また実際に曲水流觴を復元し、活用している発掘遺構として仙巖園(A. D. 17)がある。

以上の遺構をまとめると、切石流杯渠が中国の遺構 5 基 + 史料 2 件と韓国の遺構 1 基、合計 6 基 + 2 件であり、自然形水路には中国の絵画史料 1 件と日本の 12 基の遺構がある。中国の遺構 5 基の特色として、流杯渠は方形の基壇上面に掘り込まれており、多くの場合、上に屋根が架かる構造である<sup>(2)</sup>。

## 1.2 研究目的

本研究の目的は、古代中国における「自然形水路」と「切石流杯渠」の曲水系譜を整理し、日本に伝わった後、曲水流觴はどのように受容し、変化するか明らかにすることである。それから、古代中日における曲水流觴に関しての問題を提起してみたい。そして、水への親しみ方を現在にも伝える提案をしていきたい。

## 1.3 研究史

日本において、様々な曲水流觴に関する研究がなされている。研究員たちは、古代庭園・曲水流觴に関する文献史料の集約、発掘庭園遺構に関する情報の収集・整理、遺跡現地における地形・水系の調査などを行い、古墳時代から平安時代までの日本庭園の特色・形態、曲水流觴の起源・発展・性格、その後の変化などを解明した。

まず、飛鳥時代の庭園遺構は、古宮遺跡は円形平面であり、浅いすり鉢状の石積み施設で、南西方向に向かう S 字状の石組溝が流れ出すように現れていた。木下正史氏の「飛鳥時代の庭園遺構の検討(平成 14 年度)」により、その円形小池が掛樋からの水を受ける施設であり、下方の S 字溝は曲水流觴のための流路として、最も古い確認例の一つであると指摘された<sup>(3)</sup>。

それについて、奈良時代の庭園遺構は、洲浜仕様の曲池や築山石組の登場など、自然風景式の庭園様式が確立していた。高瀬要一氏は平成 15 年度に、「平城宮東院庭園(最下層/下層/上層園地)」において、平城宮東院の下層園池にある二つの蛇行溝を研究し、曲水流觴を行うとき、西蛇行溝の溝の周りを利用すること比べ、南蛇行溝の溝の北の建物を利用し、曲水流觴は必ずしも流れに沿って座るという形式ではなかったことを指摘した。また、同種の遺構が日

本の飛鳥時代以前はもとより、中国、朝鮮半島にも皆無であることも知られていた<sup>(4)</sup>。

そして、平安時代に入ると、曲水流觴は様々な貴族の邸宅でも盛んに開催されていた。榎村寛之氏の説によると、平安時代における、曲水流觴が祭祀の性格が薄くなり、逆に遊樂の性格が強くなっていた。その姿は『日本後紀』『西宮紀』『康保御記』『三長記』などの記載からわかる<sup>(5)</sup>。

一方、近年の曲水流觴に関する研究の中ですぐれた論文や著作も増えてきた。例えば、大平桂一の「史料から見た曲水の宴-王羲之が蘭亭で曲水の宴を催すまで-」、高瀬要一の「中国・韓国に残る流盃渠遺構」、榎村寛之の「史料から見た日本の曲水宴」、中島義晴の「曲水宴に用いられた可能性のある日本古代の遺構」、仲隆裕の「平安京の庭園遺構と遣水」、田村省三の「仙巖園の曲水路遺構と曲水の宴」等々がある<sup>(6)</sup>。これらの論文の共通点は庭園におけるソフト面、すなわち庭園で行われた曲水之宴（曲水流觴）を中心として、日本国内のみならず、中国と韓国を含め、行事内容と遺構実態の研究を行っていることである。本論文もこれらにしたがい、研究を展開したい。

また、相原嘉之氏は飛鳥時代における酒船石遺跡の性格を検討した。全ての発掘調査により、この石造物の上、水の流れが小さくて遅いとみられた。そして、東西南の斜面は階段を持つ石垣で覆われていた。相原嘉之氏の「酒船石遺跡」によると、酒船石遺跡の性格について、注目を浴びたのは北部地域の石造物と立地である。「これは極めて限られた人々だけが入ることができ、非公開に行われた天皇祭祀の場所である<sup>(7)</sup>」との結果が出された。筆者は、相原嘉之氏の主張とは異なる見解をもっており、本論文第4章において、新たな結論を出したいと考えている。

## 2. 古代中国における曲水流觴

### 2.1 曲水流觴の起源

曲水流觴は、春の年中行事の一つである。屈曲した流れに杯を浮かべ、それが手元に来るまでに詩歌を作る。現在の日本においては、各地の神社（京都府城南宮、賀茂別雷神社、福岡県太宰府天満宮）などで行われている。この行事はそもそも古代中国に由来する。古代中国において、すでに周代には三月上巳（陰暦三月初めの巳の日）に自然の流れに臨み、禊をし、汚れをほらい、水に流す習慣があった。鄭国では、川のほこりで招魂し、不祥をはらった。また、三月上巳の祓禊礼儀では、お酒を浜あるいは水にそそぎ、神様を祭る清めの儀式があった。しかし、漢代以前は水に入って川禊したが、次第に形式化して簡略になり、後漢代には手足を洗うだけになってきた。そして、お酒を杯に盛って流すようになったようである。魏（220～265）の時代に、禊の日が三月上巳から三月三日に移されて定着した。史料により、曲水流觴は、この儀礼を人工的な庭園中に持ち込まれた時期は晋の時代にさかのぼる。筆者は、古代中国における、曲水流觴の起源に関する史料を以下（①～⑤）のように整理した。

- ① 春秋時代「(曾皙) 瑟を鼓くことを希み、鏗爾として瑟を舍いて作ち、對えて曰く、三子者の撰に異なれり。子曰く、何ぞ傷まんや、亦た各おの其の志を言うなり。曰く、暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人を得て、沂(魯の東南にある川)に浴し、舞雩(雨乞いに使う舞台)に風して詠じて帰らん。夫子喟然として嘆じて曰く、吾は點に與せん」(『論語』先進篇)
- ② 春秋時代「鄭国の俗、三月上巳、溱洧両水の上に之き、招魂続魄し、蘭草を乗りて、不祥を払う」(『宋書』卷十五、礼志二所引、後漢の薛漢の「韓詩章句」)
- ③ 前漢「三月上巳、官人並びに東流水に禊飲す。」(『太平御覽』卷三十所引『漢書』礼儀志)
- ④ 後漢「是の月(三月)上巳、官民皆な東流の水上に繋す。洗濯祓除と曰い、宿垢疢を去り大絜を為す。」(『後漢書』礼儀志上)

⑤魏「魏自り以後、但だ三日を用い、上巳を以ってせず。」(晋書礼志)

史料からみると、曲水流觴の起源は中国にあり、春に川辺で複数のグループが行われた川禊にあるとされる。そうした行事は、すでに春秋時代には行われていたようである。上述史料①からみると、孔子の弟子曾皙はこの習俗が行われた時期は「暮春」であり、場所は「沂水」であり、形式は「水浴」と詳しく述べられた。しかし、具体的な日付と川禊が書かれていなかった。史料②③からみると、春秋戦国時代において、この習俗が川禊の要素が加え、また三月上巳の日に固定してきたことが分かる。史料③④にも、少なくとも漢代において、川禊のほか、飲酒の習慣も成立していたことがわかった。史料⑤からは、三月上巳から三月三日に本格的に移行したのは魏の時代からであることが示された。

## 2.2 自然形水路

高瀬氏が分類した「自然系」は屋外に位置する大型曲水系統を指す<sup>(8)</sup>。筆本論文においては、「自然形水路」と呼ぶこととしたい。古代中国における曲水流觴に用いられた可能性のある遺構として、最古の例は前漢時代早期 (B. C. 2世紀前半) の南越王宮の苑囿にある大型の湾曲水渠である。石で造られた蛇行溝の長さは160mに達し、両端に導水用の木樋が設けられていた<sup>(9)</sup>。楊鴻勳は、発掘資料によって南越王宮禁苑の想像図を描いた (図1)<sup>(10)</sup>。曹勁は、南越王がこの禁苑で曲水流觴を行った可能性が高いと指摘していた<sup>(11)</sup>。

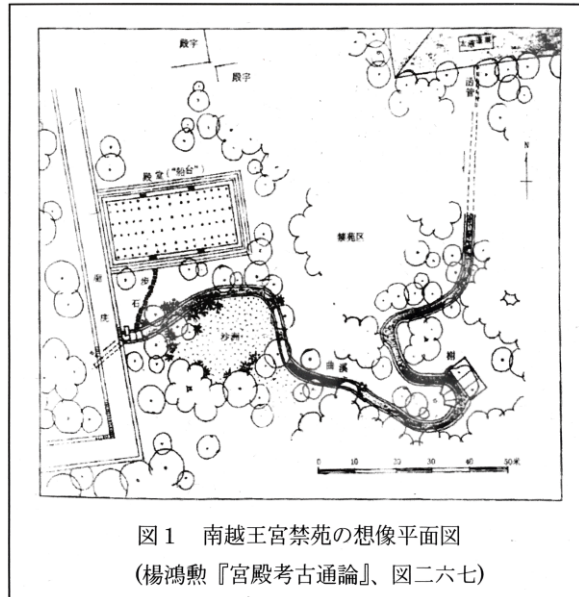


図1 南越王宮禁苑の想像平面図  
(楊鴻勳『宮殿考古通論』、図二六七)

曲水流觴に関する中国での古い史料記録は、東晋の文人王羲之が残した「蘭亭序」(353年)である。「蘭亭序」の文言により、「永和九年、岁在癸丑、暮春之初、会于会稽山阴之蘭亭、修禊事也。群賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻岭、茂林修竹；又有清流激湍，映带左右，引以为流觴曲水，列坐其次。虽无丝竹管弦之盛，一觴一咏，亦足以畅叙幽情。是日也、天朗气清、惠风和畅、仰观宇宙之大、俯察品类之盛、所以游目骋怀、足以极视听之娱，信可樂也。」(永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。群賢畢く至り、少長咸集まる。此の地に、崇山峻嶺、茂林脩竹有り。又清流激湍して、左右に映帯するあり、引いてもつて觴を流す曲水を為りその次に列坐す。糸竹管弦の盛無しと雖も、一觴一詠すれば、また幽情を暢叙することに足る。是の日や、天朗らかに気清く、恵風和暢せり。仰いでは宇宙の大を觀、俯しては品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめ懷ひを騁する所以にして、以て視聽の娛しみを極むるに足れり。信に楽しむべきなり。)と書かれている。また、この後、王羲之の「臨河序」により、「故列叙時人、録其所述。右将军司馬太原孙丞公等二十六人、赋诗如左。前余姚令會稽謝勝等十五人、不能賦詩、罰酒各三杯。」(右将军司馬太原孙丞公等二十六人、詩を賦すること左の如し。前の余姚令會稽謝勝等十五人は詩を賦すること能わず、罰酒各の三斗なり)が加えられた。この三斗は約6リットルをあらわす。



東晋永和9年（353年）三月上巳の日、王羲之は東晋の諸名士太原孫綽、陈郡谢安、僧支遁及儿子王凝之、徽之ら42人を紹興の蘭亭に集め、修禊大会をしながら、曲水流觴を行った。觴は、古代中国戦国時代から使われたお酒を盛るための器具であり、長円の形、平らな底、両側が耳がつく鳥の羽のようなもので、羽觴、耳杯、盃とも言う（図2-I、II）。一般的に曲水流觴に用いられた觴は、木製また陶器であり、小さくて軽量であった。杯が自分の前にきたとき、詩を読めない人はお酒をいっぱい飲まされた。そのため、故意に詩を怠り、お酒を楽しんだ人も少数ではなかったといわれている。



図2-I 東晋永和八年漆耳杯（羽觴）实物  
（趙德林撰 故宮博物院版權所有 江西南昌博物館收藏）



図2-II 唐代 鍍金蔓草鴛鴦紋銀羽觴  
（1970年陝西西安何家村出土）

ここで注目されるのは、現在の書家が毛筆と書紙をあらかじめ用意し、考えながら書くことと比べ、古代の中国の文人は詩歌を詠む場合、インスピレーションがわいた際に、思わず詩が口をついて出でくるといふ点である。蘭亭集會に参加した文人は計 37 首を詠み、王羲之から評価された。最後、王羲之が「蘭亭序」を一気に完成させた。残念ながら、唐代の太宗李世民が王羲之を崇拝していたために、王羲之の書画を手本として臨模し、亡くなった際に、その「蘭亭序」を副葬品として、昭陵に埋葬したのである。つまり、この作品は現存していない。後世の人が臨模品を底本として「蘭亭図」を描いた。宋代李公麟が、この表現から最古の「蘭亭図」を作り出した。ここでは元朝趙孟頫が描いた「蘭亭図巻」を取り上げた（図 3）。図巻の示すように、文人たちは曲水のそばに気楽に座り、彼らは紙筆墨いずれも持っておらず、山水を楽しむばかりである。実際に裏の竹林に回廊のついた蘭亭があり、亭内に長方形の卓が用意されている。真ん中に座っている赤服の人が王羲之である。両側の 2 人の文人は蘭亭に入り、自分が詠んだ詩歌を書き、王羲之に渡し、評価をもらっている。これは王羲之の蘭亭集會の楽しみであり、高瀬氏はこれが屋外に位置する「自然系」すなわち「自然形曲水路」であり、日本に入ってきたと指摘した<sup>(12)</sup>。なお、近年日本で復元された曲水流觴も「蘭亭図」に大きく影響されたと考えられる。



図 3 蘭亭図巻局部  
(元 趙孟頫)

ただ、日本の「蘭亭図」の画像に関するもっとも古い史料は15世紀のものであり、王羲之の時代に近い資料は今のところ発見できていない。したがって、蘭亭曲水流觴の姿を伝える確実な史料といえるのは、王羲之の「蘭亭序」「臨河序」の文言のみである。これらについて、筆者は3つの疑問があると考えている。

まず、1点目は、「蘭亭序」によれば、蘭亭曲水宴では王羲之を除き、四十一人の文人が参加している。これらの文人が同時に自然形水路に沿って座り、仮に一人ずつ1m<sup>2</sup>のスペースを占有したとすれば、全体で約41mの長さに及ぶことになる。非常に長いことから、流れてきた流杯は自分の杯であることが意識できたか、また上流から下流まで流す時間はかかりすぎるため、混乱しなかったかと、疑問が挙げられる。ただし、文人たちは何人かずつ交替で座っていたと考えれば、空間と時間が節約され、この問題も軽減されていたのかもしれない。

2点目は、「蘭亭序」の内容からみると、「仰いでは宇宙の大を觀、俯しては品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめ懐ひを騁する所以にして、以て視聽の娛しみを極むるに足れり。信に楽しむべきなり。」と書かれており、それは大自然風景を詠むことではなく、考えに考えていた人生の哲学ではいか、ということである。自分が目にしている自然は千変万化しているが、平生の希望と現在の心境を唱えているのであろうかという疑問が挙げられる。

3点目は、「前の余姚令會稽謝勝等十五人は詩を賦すること能わず、罰酒各の三斗なり。」といわれたが、当時、詠詩が貴族の必修の教養ではなかったということが指摘できる。

### 2.3 切石流杯渠の位置づけ

前述のように、曲水流觴は、もともと自然の川辺で行われていた川禊が起源であり、これに遊びの要素が付加されて庭園内で行う行事に発展したものである。最初は、自然の水路を利用し、その後現存するような切石流杯渠へと変化した。この曲水は、水渠の上に立つ建物から由来した流杯亭・泛觴亭・九曲亭・流杯殿・流杯堂など、また、建物下の水路から由来した流杯渠・流杯池などと

いうように様々な呼び方がある。本論文では、便宜をはかるため、統一して「切石流杯渠」と呼ぶことにする。

古代中国では魏(220～265)、西晋(265～316)、東晋(317～420)の時代に、王羲之の「蘭亭序」の内容により描かれた「蘭亭図」に表現されたような自然形曲水路が生まれ、そこで曲水流觴が行われたのである。その後、切石流杯渠が生み出された。これらに関する史料として次に、①②を取り上げる。

①魏「魏明帝天淵池南、設流杯石溝、燕群臣。晋海西鐘山後流杯曲水、延百僚、皆其事也。官人循之至今」(『宋書』礼志二)

②魏「漢儀、季春上巳、官及百姓皆禊於東流水上、洗濯祓除去宿垢。而自魏以後、但用三日、不以上巳也。晋中朝公卿以下至于庶人、皆禊洛水之側。趙王倫篡位、三日会天泉池、誅張林。懷帝亦会天泉池、賦詩。陸機云「天泉池南石溝引御溝水、池西積石為禊堂。」本水流杯飲酒、亦不言曲水。元帝又詔罢三日弄具。海西於鐘山立流杯曲水、延百僚、皆其事也。」(『晋書礼志』)

古代中国における、庭園の中で行われた曲水流觴の初見は、前掲史料①の魏の明帝が洛陽華林苑の天淵池の南に設けた流杯石溝である。これが、文献で確認できる最初の切石流杯渠であろう。しかしながら、「臣下たちを集合させ、宴会を開く」だけで終わり、この段階でまだ詩歌を詠むということはされていなかったと考えられる。これと同じ石溝を指すと考えられるのが史料②の記述である。ここの天泉池は、天淵池と同じ場所であろうと考える。西晋の懷帝が3月3日に洛陽の天泉池で群臣と酒を飲んだり、詩歌を詠んだりしたとき、陸機の言葉を引き、「天泉池南石溝引御溝水、池西積石為禊堂。-中略-本水流杯飲酒、亦不言曲水。」<sup>(13)</sup> (天泉池の南の石溝の水を引き、池の西に石を積み重ねて禊堂となす。-中略-本水に杯を流しながら、飲酒する。曲水とは言わなかった。) 禊堂の中に石を用いて造ったのはおそらく切石流杯渠に属すると考えている。そして「本水流杯飲酒」という表現もある。

また、5世紀末から6世紀中頃、梁の宗懐は『荆楚歳時記』を編纂した。その後、隋の杜公瞻が注を付している。『荆楚歳時記』は、長江中流域(今湖北

・湖南)を中心として、当時の民衆の行事や習俗を記録したが、注には年中行事の沿革や南北習俗の相違などが補足されている。日本の守屋美都雄氏による詳細な研究がある。その中では、「三月三日曲水の飲」の由来の説明に『南岳記』を引き、「それ山西の曲水壇は、水、石の上に従い行き、士女、河(一に「行」に造る)壇に臨む。三月三日に逍遥する所の処と。」とある<sup>(14)</sup>。山西とは、渭河平原、すなわち長安を中心とする一帯である。史料②の禊堂、『荆楚歳時記』の曲水壇、河壇はいずれも石を積んで造った基壇の上に切石流杯渠を設けられたものであり、中国現存の流杯渠遺構の形に近いものではないであろうか。「行」に造るとは水路の形に対しての補足説明であり、行書のようにぐるぐると巡る形の流杯渠であったと考えれば、切石流杯渠にふさわしい表現であろう。これらは洛陽、長安を中心とする黄河流域の話である。残念ながら、現存する流杯渠遺構は黄河流域でしか発掘されていない。この遊びを「曲水の飲」と呼ぶのは、川禊と飲酒という行事の内容を反映しているのであろう。このような「曲水の飲」は貴族の中で行われた行事であり、一般的な民衆は習俗として自然の川のそばで禊を行ったようである。

ただし、『荆楚歳時記』において詩を詠むことと罰杯のことはまったく触れられていない。内容表現のほうで、詩歌と罰杯を伴う王羲之の蘭亭曲水流觴とは異なっていた。つまり、「曲水の飲」は禊の性格を持ち、かつ遊びの行事でもあり、詠詩と罰杯を伴う王羲之の蘭亭曲水流觴とは大きく内容が異なっているものであった。この『荆楚歳時記』が奈良時代に日本に伝来し、当時の教養の人に強い刺激を与えた。輸入当初からも禊禊習俗の要素がなく、流れに沿って風雅な宴会を行うものとして貴族社会の中に取り込まれた。

また、王羲之の蘭亭曲水流觴は北朝の「曲水の飲」の文化が南に伝わって変化してきた形といわれていた。一般的に王羲之の曲水流觴に対する理解は「蘭亭図」により、自然形水路が作られ、文人が水路に沿って座り、詩歌を詠むという形式である。しかし、前述のように黄河流域は既に切石流杯渠が造られていたため、曲水の文化は北朝から南朝に伝わったとすれば、建康を中心とする南朝にも切石流杯渠があったはずである。しかし、残念ながら、長江流域では今まで切石流杯渠の遺構は見つかっていない。切石流杯渠は南朝にもたらされ

なかったのか、あるいはもたらされたが、定着しなかったのか。なぜ、南朝では定着しなかったのかという問題は、いまだに解明されていない。

それでは、切石流杯渠についての史料を以下のように整理してみよう。

『太平広記』には「北齊有沙門靈昭甚有巧思。武成帝令於山亭造流杯池。船每至帝前。引手取杯。船即自住。上有木小兒撫掌。遂於絲竹相応。飲訖放杯。便有木人刺還。上飲若不盡，船終不去。」<sup>(15)</sup>（北齊時代に巧妙な考えを持つ沙門靈昭は皇帝のために山亭で流杯池を造った。皇帝が船の上に乗せた杯を取ると、船が止まり、音楽に合わせて木製の人形が拍手する。酒を飲み干す後、皇帝が杯を船に置くと、人形が船を漕ぎ戻す。皇帝が酒を残したら、船も戻さない）とあり、この山亭に造られた流杯池も小型の切石流杯渠に属する可能性が高いと考えられる。

『太平御覧』卷一七五に『兩京記』により、「流杯殿東西廊、殿南頭兩辺皆有亭子以間山池。此殿上作漆渠九曲、從陶光園引水入渠、隋煬帝常於此為曲水之飲、在東都。」と指摘した<sup>(16)</sup>。（（隋の煬帝）は東都洛陽で流杯殿を造った。流杯殿の東西両側に渡り廊下があり、殿の南側の両端ともにあずまやが池に張り出している。その中に九曲の漆渠があり、陶光園からみずを引き、隋煬帝はよくここで曲水の飲を行っていた）という。しかし、その九曲流杯渠の材料は漆であるが、切石とは異なるものであったという点が興味深い。

唐代に入って曲水流觴は流れに臨んで宴を開き、花見を行いながら詩歌を読むという遊びに発展した。切石流杯渠に関する記録は、文献史料にもよく見られる。ここでは下記の①～⑨を取り上げる。

①「流杯亭侍奉宴詩者、唐武後久視元年幸臨汝湯、留宴群臣応制詩也。」（歐陽修『集古代録跋尾』卷六 p 17883）<sup>(17)</sup>

（則天武後は久視元年（700）臨汝の温泉に行幸し、群臣に「流杯亭侍宴詩」をつくらせていた。）

②「（安樂公主）又為九曲流杯池、作石蓮華台、泉於台中流出、窮天下之壯麗、言語之難盡」（『朝野僉載』卷之三 p 38）<sup>(18)</sup>

（安樂公主は九曲の流杯池と切石の蓮華台を造り、泉水は蓮華台から湧

き出し、それは全ての天下の壮観であり華麗な言葉でも描写できないものである。)

- ③ 「(景龍四年) 三月甲寅、幸臨渭亭修禊飲、賜群官柳捲以避惡。丙辰、遊宴桃花園。」 (『旧唐書』 卷七中宗本紀 p 149) <sup>(19)</sup>

(唐中宗が景龍四年(710) 三月甲寅に臨渭亭に行幸し、修禊の飲会を開き、群臣に柳捲を与え、丙辰に桃花園で遊樂の宴をした。ここの「臨渭亭」は「流杯亭」の可能性が高いといわれている。)

- ④ 「(西京苑内) 南昌園園北、昌国亭、流杯亭、青門亭、邵平種瓜之所也。」 (『太平御覽』 卷一九四) <sup>(20)</sup>

(『太平御覽』に『兩京新記』に西京長安の禁苑内「流杯亭」があるという。)

- ⑤ 「淥酒白螺杯、隨流去復回。似知人把處、各向面前來。」 (『全唐詩』 張籍『和韋開州盛山十二首・流杯渠』 p 4347) <sup>(21)</sup>

(澄み切った酒、透き通った杯、流れ去って復に回る。飲む人がどこから杯を取ると分かるように、それぞれの目の前に来た。ここで指摘した淥酒白螺の杯は実用性と観賞性両方とも持っているであろう。また、この流れの屈曲した姿と飲酒した人の趣も分かった。)

- ⑥ 「激水自山椒、析波分淺瀨。回環疑古篆、詰曲如熒帶。寧憇羽觴、遲惟飲親友會。欲知中聖處、皓月臨松蓋。」 (傅璇琮、周建國『李德裕文集校箋』 p 603) <sup>(22)</sup>

(文宗と武宗朝の宰相である李德裕の洛陽平泉山莊にも流杯石があり、その「古篆」「熒帶」のごとく、屈曲した流れに、親友の宴会を楽しみにしていた。)

- ⑦ 「白馬泉、毎年刺史三月上旬於此泉起曲水流杯堂、引泉水為祓禊之所、臨時構造、事竟毀除。其流杯堂本在壘城西。」 (『太平御覽』 卷一七六)

<sup>(23)</sup>

(『太平御覽』に唐代吳從政の『襄沔記』を引き、(襄州) 刺史は毎年3月上旬に白馬泉で禊をするための曲水流杯堂を造る。臨時的な構造のため、その後壊してしまう。ここで注目されるのは、まず、飲酒ではな

く、祓禊をするために曲水流杯堂を造ることである。また、この曲水流杯堂は臨時的な構造であった。)

- ⑧「閬州之東百餘里、有县曰新政。新政之南数千步、有山曰離堆。斗入嘉陵江、直上数百尺、形勝縮臺、欹壁峻肅、上崢嶸而下回湫、不與眾山相連屬、是之謂離堆。东面有石堂焉、即故京兆尹鮮于君之所开鑿也。堂有室、廣輪表丈、簫豁洞敞。聞江聲、徹見群象、人村川坝、若指诸掌。堂北磐石之上有九曲流杯石焉。」(顔真卿「鮮于氏離堆記」)<sup>(24)</sup>

(京兆尹鮮于君が嘉陵江のそばに聳え立って、険しい離堆山の東側に石堂を造り、石堂の北側の磐石の上に九曲の流杯石があった。ここからみると、高く険しい離堆山の東側に流杯石の石堂を造ったのは素晴らしい眺めであろう。)

- ⑨「不上酒家樓、池邊日獻酬。杯来轉巴字、客座繞方流。酌滴苔紋断、泉連石岸秋。若能山下置、歳晚願同遊。」(姚合「泛觴泉」)<sup>(25)</sup>

(山の上に方形の流杯石の周りに客が座り、杯が巴字形の水渠に沿って流すという様子が見られる。「巴」字形の屈曲した流杯渠は新たな形であろう。)

以上の史料を見ると、唐代に入り、曲水流觴は遊びの特色を強く持ち、盛んに行われていた。流杯亭・流杯堂・流杯池・流杯渠などが造られた場所と形状もさまざまな様式になった。また、親友たちや家族で一家団欒で花見をしながら、詠詩と飲酒をしている姿は、平和で繁栄した唐代の民衆の生活状態の体現であろう。しかしながら、唐代あるいはそれ以前の時代に切石流杯渠の実物として確認できるのは一つも見つかっていない。

宋代には、文献の記録も多くみられている。たとえば、『文献通考』に天禧四年(1020)仁宗皇帝は天章閣を建て、その中に桃花紋の石を流杯石にしたといわれている<sup>(26)</sup>。そして、蘇軾の「滿江紅・東武会流杯亭」にも「官里事、何時畢。风雨外、无多日。相将泛曲水、满城争出。君不见兰亭修禊事、当时坐上皆豪逸。到如今、修竹满山阴、空陳迹」とある。北宋時代盛んに行った曲水流觴の様子、また蘭亭旧地をたずねてみても、既にだれもいないという悲しみ



がみられた。さらに、南宋時代に陳宓の「流杯石」には「清波映文石、置此亦奇事。年年上巳時、聊將姓名記」<sup>(27)</sup>と書いており、曲水流觴が行われた上巳の日、また清波文石が互い照り映えている場面はみられた。

そのうえ、宋代は曲水流觴に関する文献資料のみならず、流杯石の図式と実物例の記録も今日に伝わっている。北宋李誠の『營造法式』巻三により、「流杯渠（剗鑿流杯、砌造流杯）、造流杯石渠之制、方一丈五尺、用方三尺石二十五段造。其石厚一尺二寸。剗鑿渠道広一尺、深九寸。其渠道盤屈、或作「風」字、或作「國」字。」<sup>(28)</sup>（流杯石渠を「剗鑿流杯」と「砌造流杯」に分け、一丈五尺の方形で方三尺の石を二十五枚組み合わせ造り、えぐられた渠は広さ一尺、深さ九寸と規定されている。石渠の形は「国」字流杯渠（図4）と「風」字流杯渠（図5）二つの種類がある）と上げられている<sup>(29)</sup>。図に示されたように「国」字流杯渠と「風」字流杯渠の構造はほぼ同じであると思う。また、石面の空いてるスペースに牡丹花や宝相花などを飾り物として植えたと書かれている。しかし、『營造法式』は建築技術の書であり、造られたものの用途は触れていないため、これだけで切石流杯渠は曲水流觴のために造られたものだと言うには、確かな理由が不十分だと考える。

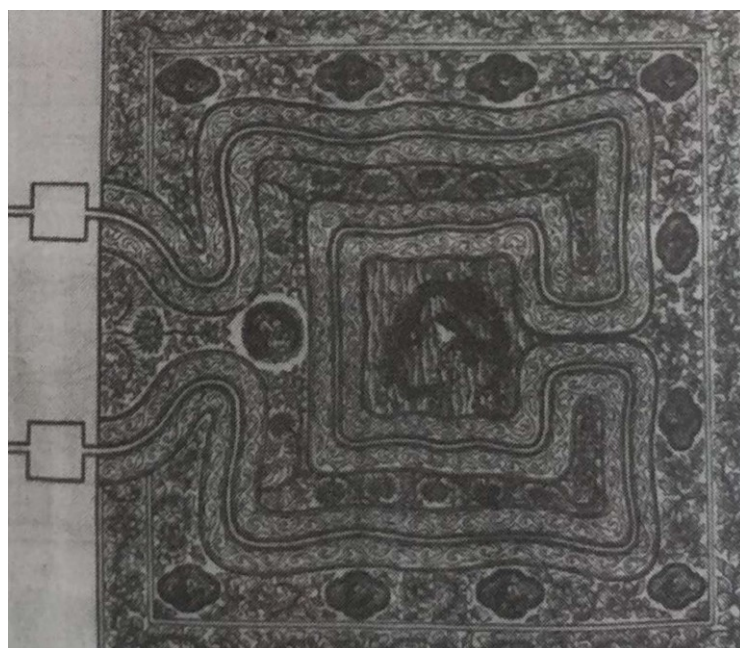


図4 「国」字流杯渠

（李誠撰 『營造法式』 卷二十九 図一六一）

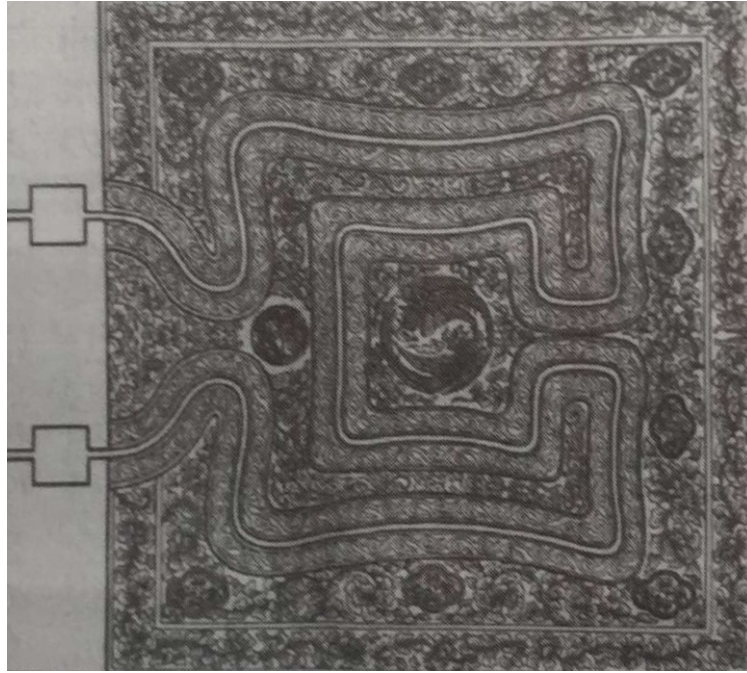


図5 「風」字流杯渠

(李誠撰 『營造法式』 卷二十九 図一六三)

現在までに最古の実物例として知られているのは、河南省嵩山の宋代崇福宮の「泛觴亭」にあった流杯渠である。関野貞は大正時代に初めてこの流杯渠を調査し、その写真(図6)と平面図(図7)を示した。「溝の広さ入口出口共に五寸二分深さ入口四寸出口四寸三分にして其の差僅かに三分、而して溝の全長約三十五尺なれば水の流ること頗る遅かりし者の如し。溝の広さ中央部は出入口よりは稍狭く大抵四寸五分前後なり」と、流杯石の状況が詳しく描かれていた。さらに、「此の平面より想像すれば亭は塼築の壇上に立ち、方一間にして四面を開放し、四注の屋蓋を有し、大理石の床上に曲水の溝を通ぜしものにして、規模意外に小、僅かに七人の詩客を容るるに足りしのみなり」<sup>(30)</sup>とあるように、流杯石を利用して曲水流觴を楽しむ場面を復元していた。この実例は『營造法式』に規定される流杯石の制度と比べ、実物の溝の寸法が其の制度の半分しか達していないことが示された。残念ながら、この崇福宮泛觴亭の流杯渠はすでに破壊されてしまった。

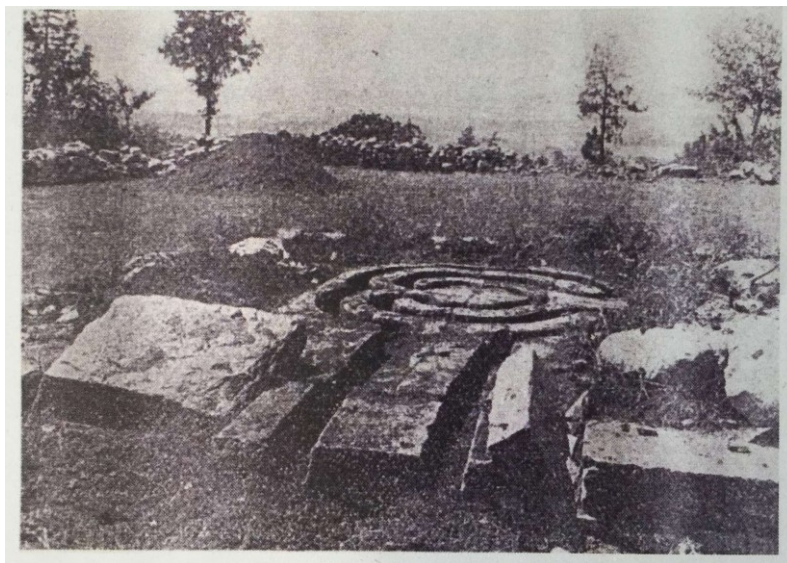


図6 崇福宮泛觴亭流杯渠  
 (関野貞「西遊雑信」第三四六図)

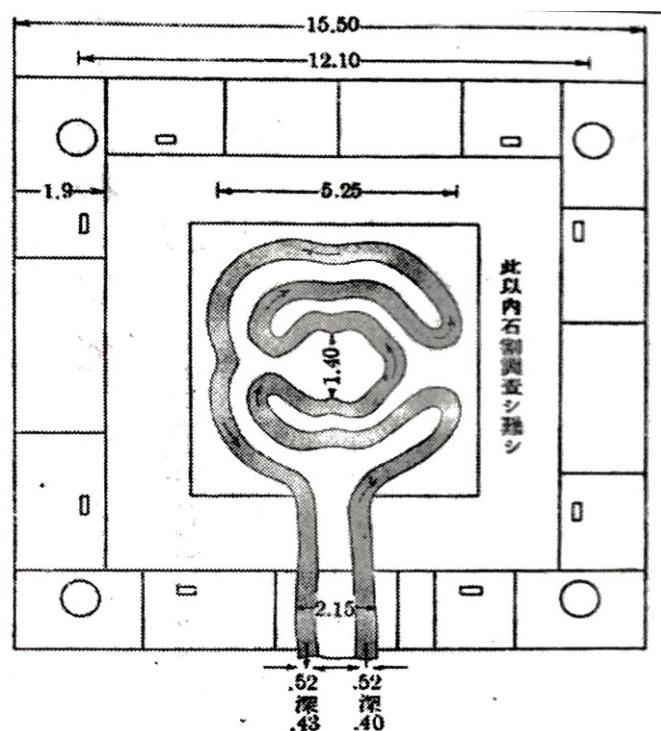


図7 崇福宮泛觴亭流杯渠平面図  
 (関野貞「西遊雑信」第三四四図)

一方、明末の崇禎4年に完成した『園冶』は作庭書であり、曲水に関してこのように記載されている。「曲水、古皆鑿石漕、上置石龍頭瀆水者、斯費工類

俗、何不以理澗法、上理石泉、口如瀑布、亦可流觴、似得天然樂趣。」その中、（「むかしは石溝を彫り、水は石龍頭から落とすが、これは費用がかかり、また俗っぽいである。澗のような形で滝のように水を落とせば、杯を流すこともでき、天然の趣も得られる。」）しかし、『園冶』には曲水流觴の内容より、石溝の形式しか考えられていなかったのであろう。

中国における現存する流杯渠遺構は、明清時代のものと考えられる。高瀬氏の「中国・韓国に残る流杯渠遺構」には北京潭柘寺流杯亭（図8）・紫禁城寧寿宮禊賞亭（図9）・香山寺（図10）等の流杯渠簡略図が掲載されている。

(31)

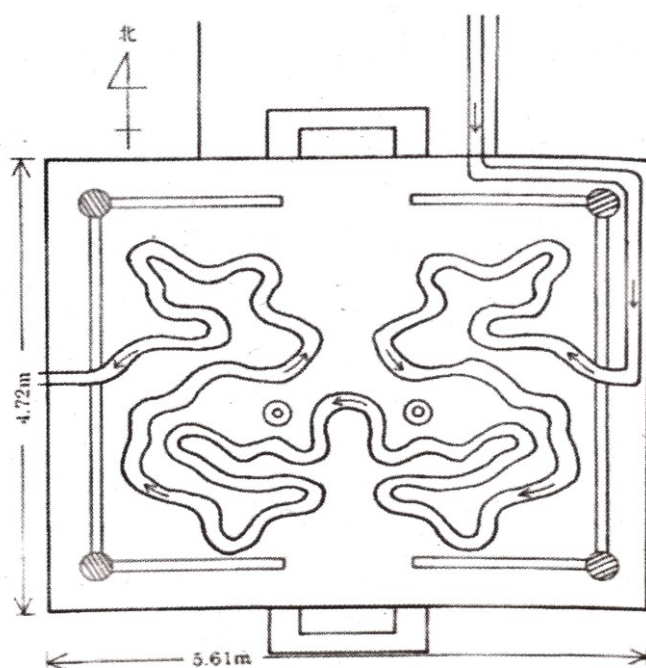


図8 北京潭柘寺流杯亭  
(『北京档案』1995年3期 p43)

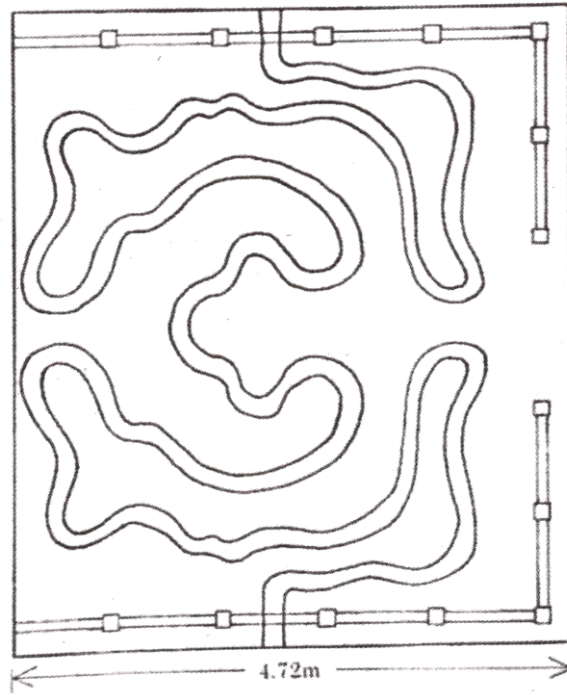


图9 紫禁城寧壽宮禊賞亭  
 (『北京档案』1995年3期 p43)

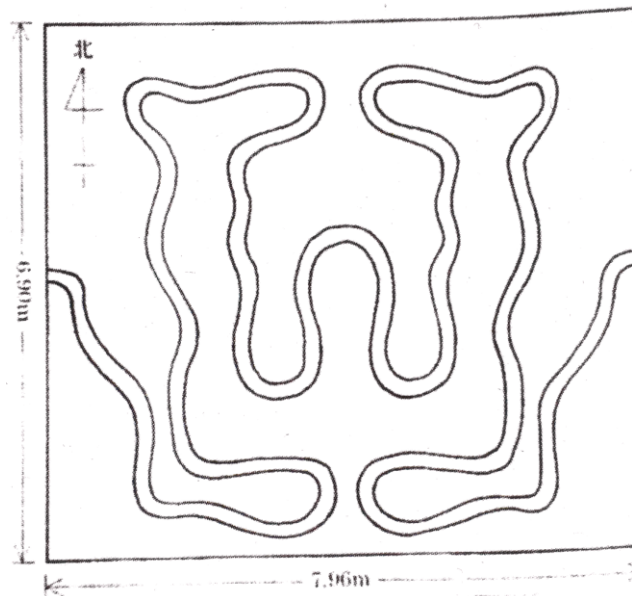


图10 香山寺  
 (『北京档案』1995年3期 p44)

潭柘寺流杯亭は「猗玗亭」とも呼ばれ、「猗」は感嘆詞として、「玗」は美しい石を指し、水がつく美しい玉石に対しての褒め称えるのであろう。この猗玗亭は、方形尖頂の木製建築であり、屋根は緑の瑠璃瓦で覆われ、高さ2丈、長さおよび広さは各1丈あまりで、亭内に漢白玉石が組み立てられ、屈曲の石溝である。その石溝は広さ、深さが各10cmであり、南から見ると、「龍頭」と似ていて、逆に北から見ると、「虎の頭」と似ている。この「龍頭泉」の形はおそらく上述『園冶』における「石龍頭」のようなものであろう。流杯亭東側のある漢白玉石で彫刻された龍頭泉から水を引き、石溝の東側から屈曲した流れを経て西側に出る構造である。清代乾隆帝がこの流杯亭で行幸したとき、群臣と亭の周りに座り、お酒を入れた竹製の杯を石溝の入り口に置き、ゆっくり流し、いったん誰かの前に止め、詠詩あるいは罰杯を行ったといわれる。さらに、乾隆帝も潭柘寺流杯亭において、「猗玗亭」一曲を詠み、「扫径猗猗有绿筠、频伽鸟语说经频。引流何必浮觴效、岂是兰亭修契人。」という。そこから楽しい雰囲気が見える。

紫禁城寧壽宮禊賞亭は乾隆37年（1772年）に造られた。平面図は「凸」字形を示し、屋根は「入母屋造り」の形式で、即ち上部においては切妻造（長辺側から見て前後2方向に勾配をもつ）であり、下部においては寄棟造（前後左右四方向へ勾配をもつ）となる構造をもつ。亭内に屈曲した流杯渠は長さ27mであり、南側の築山の井戸から水を引き、築山の隠す水渠を経て流杯渠に流れてきた。禊賞亭の内外側ともに竹の様子が描かれ、王羲之蘭亭修禊の「茂林修竹」が具現化と思う。しかしながら、潭柘寺流杯亭が南向きと比べ、禊賞亭が東を正面として、また形状も単純されたとみられた。

香山寺流杯亭の簡略図からみて、潭柘寺流杯亭・禊賞亭より、曲線のラジアンも大きくなり、流れも緩やかになることが分かる。また、水は東から西へ流れ、南が正面であろう。

以上、文献資料を中心として、古代中国の切石流杯渠の系譜を整理した。切石流杯渠の遺構もみながら、古代中国では自然形水路より、切石流杯渠が主流であることが明らかになった。文献資料を検討した結果、魏晋時代から切石流杯渠系統の曲水が既に現れ、南北朝時代にもよくみられたことが分かった。こ

の間、本来の祓禊、祭祀儀礼から濃い雰囲気にもまれた宴会遊樂に変化した。北宋李誠の『營造法式』にも流杯亭の図式に関するの記録があり、唐宋時代にきわめて盛んになったことがわかる。当時、流杯亭はすでに朝鮮半島に伝わり、その後日本にも伝わった。明代に入って流杯亭は南北地域とも造られたが、清代に皇室専用の建築形式に発展した。北京における現存流杯亭は4基であり、すなわち中南海の流水音亭、紫禁城寧壽宮禊賞亭、恭王府の沁秋亭、潭柘寺猗玗亭である。紫禁城寧壽宮禊賞亭と恭王府の沁秋亭は観覧しかできず、中南海は中国の中央政府所在地なので、進入禁止であり、潭柘寺猗玗亭は唯一の遊樂地として、現在の人々に曲水流觴を楽しむために復元されている。

### 3. 日本庭園における曲水流觴の受容と変化

#### 3.1 曲水流觴に関する資料

『古代庭園研究Ⅰ ―古墳時代以前～奈良時代―』によれば、三月上巳また3月3日の宴に関する記事は『日本書紀』に4回であり、『続日本紀』に16回である。このうち、曲水流觴（曲水宴）を行ったことを明記している記録は『日本書紀』に3回であり、『続日本紀』に16回である。ここでは以下の史料を取り上げる<sup>(32)</sup>。

『日本書紀』より

- ① 顕宗天皇元年(450)三月上巳、幸後苑、曲水宴。
- ② 顕宗天皇二年(451)三月上巳、幸後苑曲水宴。是時、喜集公卿大夫・臣連国造伴造、為宴。群臣頻称万歳。
- ③ 顕宗天皇三年(452)三月上巳、幸後苑、曲水宴。
- ④ 持統天皇五年(690)三月壬申朔甲戌(3月3日)、宴公卿於西廳。

『続日本紀』より

- ①文武五年(701)三月丙子(3月3日)、賜宴王親及群臣於東安殿。
- ②神龜三年(726)三月辛巳(3月3日)、宴五位已上於南苑。但六位已下官人及大舍人・授刀舍人・兵衛等、皆喚御在所、給塩・鍬各有數。
- ③神龜五年(728)三月己亥(3月3日)、天皇御鳥池塘、宴五位已上。賜祿有差。又召文人、令賦曲水之詩。各賚繩十疋、布十端。内親王以下百官使部已上賜祿亦有差。
- ④天平元年(729)三月癸巳(3月3日)、天皇御松林苑、宴羣臣。引諸司并朝集使主典以上于御在所。賜物有差。
- ⑤天平二年(730)三月丁亥(3月3日)、天皇御松林宮、宴五位以上。引文章生等、令賦曲水。賜繩・布有差。
- ⑥天平宝字六年(762)壬午(3月3日)、於宮西南、新造池亭、設曲水之宴。賜五位已上祿有差。
- ⑦神護景雲元年(767) 壬子(3月3日)、幸西大寺法院、令文士賦曲水。賜



五位已上及文士祿。

- ⑧宝亀元年(770)三月丙寅(3月3日)、車駕臨博多川、以宴遊焉。是日、百官・文人及大學生等各上曲水之詩。
- ⑨宝亀三年(772)甲申(3月3日)、置酒鞞負御井、賜陪從五位以上及文士賦曲水者祿有差。
- ⑩宝亀八年(777)乙卯(3月3日)、宴次侍從已上於内嶋院。令文人賦曲水。賜祿有差。
- ⑪宝亀九年(778)三月己酉(3月3日)、宴五位已上於内裏、令文人賦曲水。賜祿有差。
- ⑫宝亀十年(779)三月甲辰(3月3日)、宴五位已上、令文人賦曲水之詩。賜祿有差。
- ⑬延暦三年(784)三月甲戌(3月3日)、宴五位已上、令文人賦曲水。賜祿有差。
- ⑭延暦四年(785)三月戊戌(3月3日)、御嶋院、宴五位已上。召文人令賦曲水。賜祿各有差。
- ⑮延暦六年(787)三月丁亥(3月3日)、宴五已上於内裏。召文人令賦曲水。宴訖、賜祿各有差。
- ⑯延暦九年(790)三月己亥(3月3日)、停節宴。以凶服雖除、忌序未周也。

以上の曲水流觴に関する史料は3.2で詳しく分析していく。

### 3.2 日本における曲水流觴の起源

3.1の史料を見ると、『日本書紀』顕宗紀における、3年間続けて曲水宴が行われたと記す記事がある。その後、約240年の空白期があった。「曲水宴」という表現はこの3件のみであり、信用し難しいと考えられている。空白期が長く続いた後、3月3日の宴会に関する記事は持統天皇五年(690)から延暦九年(790)までの約100年の間に計16回書かれている。此の時期の曲水之宴は定例化した行事であり、天皇の権威に基づく政治的な儀式であった。

持統天皇五年以前に曲水之宴が行われた可能性はあるが、定例化するの持

統天皇五年以降であろう。そして、日本における曲水流觴は7世紀後半から始まったと考えられる。確実な最古の史料は上述『続日本紀』における文武天皇5年3月3日に、「文人を召して曲水之詩を賦さしめる」というところである。

『続日本紀』における、奈良時代に宮廷行事として曲水流觴を行ったことを示す記事がある。3月3日のこの日には五位以上の貴族を対象として宴会を行うことが主的な目的であり、この宴会に文人を呼び、曲水の詩歌を詠ませる趣が見られる。便宜上、『続日本紀』に示した奈良時代後期の曲水之宴に関する史料は以下の表1にまとめる。

年	天皇	場所	宴の参加者	賦者
神亀三年(726)	聖武	南苑	五位以上	不明
神亀五年(728)	聖武	鳥池塘	五位以上	文人
天平元年(729)	聖武	松林苑	羣臣	諸司
天平二年(730)	聖武	松林宮	五位以上	文章生
天平宝字六年(762)	淳仁	宮西南新造池亭	五位以上	不明
神護景雲元年(767)	称徳	西大寺法院	五位以上	文士
宝亀元年(770)	称徳	博多川	百官・文人、大学生	同左
宝亀三年(772)	光仁	鞆負御井	陪従五位以上	文士
宝亀八年(777)	光仁	内嶋院	侍従以上	文人
宝亀九年(778)	光仁	内裏	五位以上	文人
宝亀十年(779)	光仁	不明	五位以上	文人
延暦三年(784)	桓武	不明	五位以上	文人
延暦四年(785)	桓武	嶋院	五位以上	文人
延暦六年(787)	桓武	内裏	不明	文人

表1 奈良時代後期における曲水之宴

実は『続日本紀』の計16回の記事のうち、前掲史料①②④⑬の曲水についてまったく触れられていない。また、曲水に触れられた12回の記事のうち、11回は「令文人賦曲水」と書かれるだけであり、直接に「設曲水之宴」と触

れているのは史料⑥のみである。いずれも杯を川の流に浮かべ、自分のところにくる前に詩歌を詠み、詩歌ができなければ罰杯を飲ませるという表現は出てこない。曲水之宴の流觴と罰杯は毎回行われていたのであろうか。あるいは、詩宴のみ開き、流觴を伴うことがないであろうか。それとも、毎回流觴と罰杯を行うのが当然であるため、わざわざ書くことを略したのであろうか。

次に、宴会が行われた場所から見ると、聖武天皇は「南苑」・「鳥池塘」・「松林苑」・「松林宮」、淳仁天皇は「宮西南新造池亭」、称徳天皇は「西大寺法院」、光仁天皇は「靱負御井」・「内嶋院」・「内裏」、桓武天皇「嶋院」など各所で行われ、史料⑫⑬この2回は場所が書かれていない。そのなかで、内裏のみ2回（宝亀九年と延暦六年）登場した。また、松林苑と松林宮は同じ場所であると思われる。それぞれの場所は自然的な川や井戸であり、曲水流觴のために設けられたものではなく、毎年変わるのが特色である。そして、毎年固定的に行ったのではない。場所が変わるも宴会の楽しさの一つであろうと考えられる。

そして、宴会の参加者と賦者は別であることがみられた。たとえば、神亀五年(728年)に宴の参加者は五位以上であり、賦者は文人である。天平二年(730年)の宴の参加者は五位以上であり、賦者は文章生であることが示されている。文章生は文官の見習いであり、五位以上ではなく、またその段階で五位以上になることも考えにくいであろう。宝亀元年(770年)の例からみると、称徳の博多川の宴では、百官・文人と大学生が入った。ここでは、宴の参加者と賦者がはっきり分けられていなかったが、大学生が入ったことが特色であった。つまり、宴会は文章生や大学生が自らの学識を高めるための儀礼として行われた側面があると考えられる。

さらに、宝亀八年(777年)の例で、参加者は「侍従以上」とし、侍従は五位の貴族の子弟の中から選ばれたが、令外官であり、天皇のお気に入りの者である。つまり、宴会は天皇と私的な主従関係を強く持っている人を対象として開かれた場合もあったのだと考えられる。

また、倉林正次氏の『饗宴の研究』によると、「中国から渡来した春の宴会儀礼で、曲水に盃を流して漢詩を競うものである。奈良時代後半に盛んに行わ

れたが、平安時代初期、平城天皇の時代に、父の桓武天皇と母の藤原乙牟漏の命日が3月だという理由で停止され、その後はほとんど行われなかった。<sup>(33)</sup>」と書かれている。つまり、表1で示した時期は日本の曲水之宴の最盛期であろう。そして、元々中国から渡ってきた儀礼であるため、漢詩が作られるのが通例であっただろう。

一方、舒明天皇2年(630年)から寛平6年(894年)まで、中国唐代先進の技術と仏教の経典をならうため、日本が中国に使節を派遣した。遣唐使は200年以上にわたり、当時の先進国であった唐の文化、制度、そして仏教の日本への伝入に大いに貢献した。『荆楚歳時記』も奈良時代に遣唐使により、日本にもたらされたといわれる。『荆楚歳時記』の伝入は当時の教養人に強い刺激を与えた。輸入当初からも祓禊習俗の要素がなく、流れに沿って風雅な詩宴を行うこととして、貴族社会の中に取り込まれた。

さらに、中国の唐代における、僧侶の鑑真は日本へ何度もの渡海を試みたが、6度目の753年に沖縄に到着した。鑑真は奈良時代の帰化僧として、王羲之の「蘭亭序」の臨模本を日本に伝えたといわれている。これを一つの手本として曲水之宴が行われたのであれば、流觴という表現が必要不可欠である。『続日本紀』においては、流觴についての記録が省略されたのではなく、まったく流觴にともなわなかった可能性もあり、奈良時代の曲水之宴は王羲之の「蘭亭序」を手本としたものではなかったと考えるほうが自然であるかもしれない。

結局、奈良時代の曲水之宴では、宴会を行いながら漢詩を詠んでいるが、流觴と罰杯を伴っていたかどうかについては疑問を持たざるをえない。

### 3.3 奈良時代の平城宮東院庭園蛇行溝

日本古代庭園は奈良時代前半になると、それ以前とは大きく変わり、日本庭園の原型が確立したと言われている。平城宮東院庭園は奈良時代庭園の代表として、当時の造形意匠、表現思想を表している。平城宮は、天皇の宮殿や役所で構成される奈良時代の政治中心であった。一辺1kmの正方形の東側に、南北750m、東西250mの張り出し部分がつく。奈良文化財研究所は、この張り出し部分を当初「東宮」といい、のちに「東院」と呼んでいる。(図11)

一方、『続日本紀』により、皇太子の居所は奈良時代を通じて「東宮」と呼ばれた。また、孝謙天皇の天平勝宝六年(754年)から称徳天皇の宝亀元年(770年)にかけて「東院」は宴会や儀式に用いられている。特に神護景雲元年(767年)に「東院」に瑠璃瓦を用いた「玉殿」という豪華な宮殿を造った。そして、光仁天皇宝亀四年(773年)には「楊梅宮」という宮殿を建て、宴会に用いた。これら「東宮」「東院」「楊梅宮」という施設が宴会や儀式のため用いられた重要な場所である。前述『続日本紀』の史料②に挙げられた「南苑」は、「東院」の前身である可能性が極めて高いと考えられる。

東院庭園は、東面と南面を築地塀であり、西面と北面は堀立柱塀で囲まれた。東西は約70mであり、南北は100mである。南寄りに東西は約50~60m、南北は約60mの逆L形の池がある。発掘調査の結果、平城宮東院庭園の池は3時期の変革が確認された。築造年代により並べると、最下層園池(710年頃)→下層園池(720年頃)→上層園池(770年頃)となる。3時期の園池は、全体的に均一ではなく、場所によって構造に違いがある。これらはおもに奈良時代の初めに营造され、後期に大改修されたのであり、平安時代初まで使用された。そのため大改修以前の庭園を前期庭園、以後のものを後期庭園と呼んでいる。(図12)

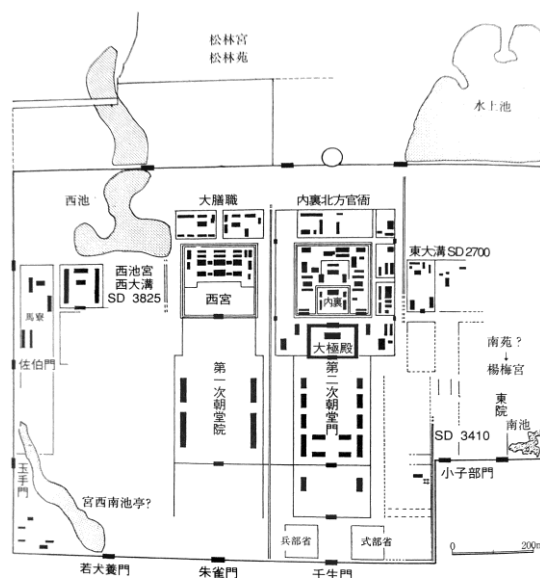


図11 平城宮の苑と池

(「平成15年度古代庭園研究会」資料 p348)

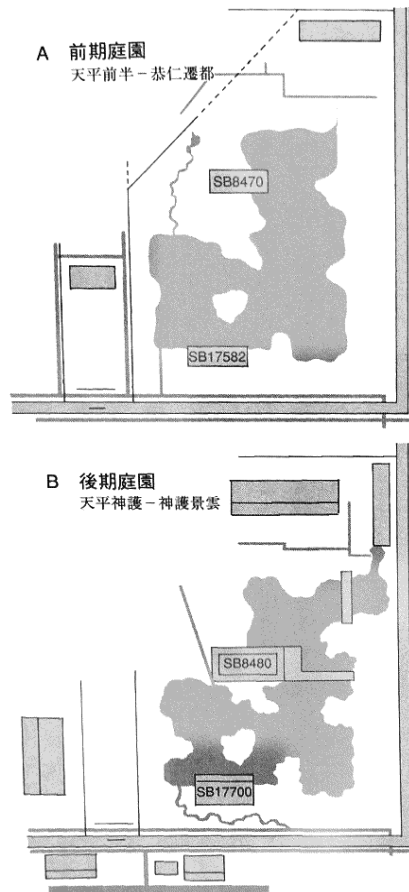


図 12 平城宮東院庭園  
(岩永作図)

図 12 で示したように、平城宮東院前期庭園の池は最大で東西約 50m、南北約 60m であり、南側からみると逆 L 字形である。汀線の出入りが少なくて単純であり、汀線沿いの池底は約 30~40cm の平石を敷き詰め、護岸の一部は石積を用いている。池の北東隅の導水路、南西隅の排水路はともに石組である。排水路の東側に幅 1m の蛇行溝が造られていたが、これは排水より新しいものという。

後期庭園の池の規模は、前期庭園とあまりかわらないが、形は大きく変化した。前期の直線部分が多い汀線と比べ、後期は岬や入り江が連続した屈曲する汀線となり、池の底は全部で小さな礫で敷き詰められ、最大の深さは約 30cm である。さらに、州浜、築山、植物などが据えられ景観に締まりができ、以後の日本庭園の意匠の主要要素が確立した。後期庭園では、唐代の宮苑の意匠や

技法を取り入れられた姿に改修され、平安時代の庭園の原型として、極めて画期的な遺跡であると考えられていた。

図13、図14のように保存状態がよく、層位が明確な断面を取り上げて説明する。

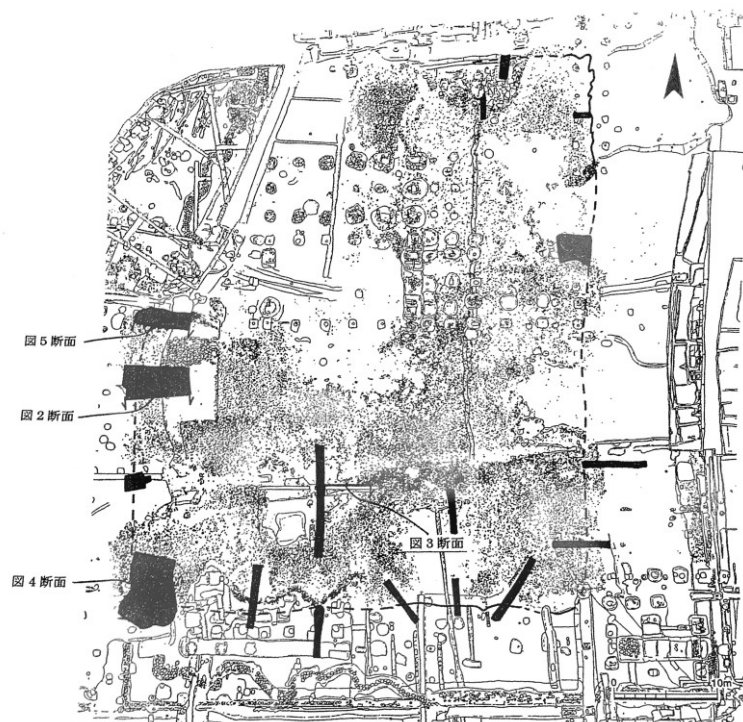


図13 最下層園池平面確認図

(「平成15年度古代庭園研究会」資料 p349)

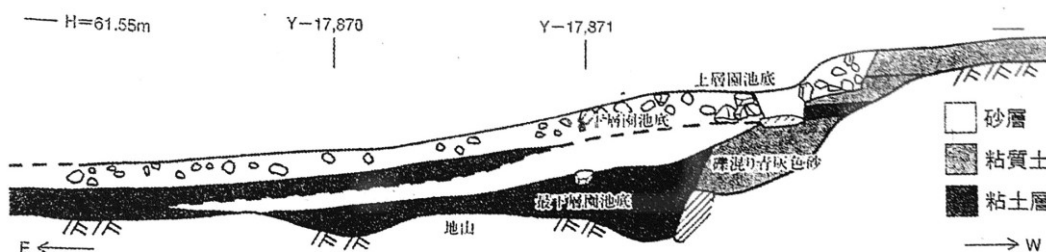


図14 園池南半部の西岸断面図

(「平成15年度古代庭園研究会」資料 p350)

「平成 15 年度古代庭園研究会」資料（一奈良時代庭園遺構の検討一）により、最下層園池 (SG5800X) は、南半部から東岸、北岸の位置をそれぞれ一つのみ確認することができたが、北半部西岸は未確認である。しかし、北部西岸も建築が建つ地盤面は山であり、池がここまで広がることはないため、西北方向への広がりも下層園池、上層園池の範囲内に納められることがわかる。池の基本的な位置や大きさはのちに作り直される下層園池、上層園池に引き継がれる。つまり、最下層園池の段階で東院庭園の池の形、敷地地割りの骨格が作られたといわれている<sup>(34)</sup>。

下層園池 (SG5800A) (図 15) は、最下層園池を埋めて作ったが、このときに単調な逆 L 字形を改め、緩やかな曲線の各辺をさらに緩やかな曲線に、また、各辺に 2 箇所程度池への張り出しを作り、全体を変化のある自然な形とする。池の深さは 40~45cm であり、池底は岸に沿って池北半部東岸、西岸の狭いところで 1~2m の帯状に、北岸屈曲部などの広いところでは 4~6m の幅に、径 30~50cm の上面が平らな安山岩玉石を敷く。

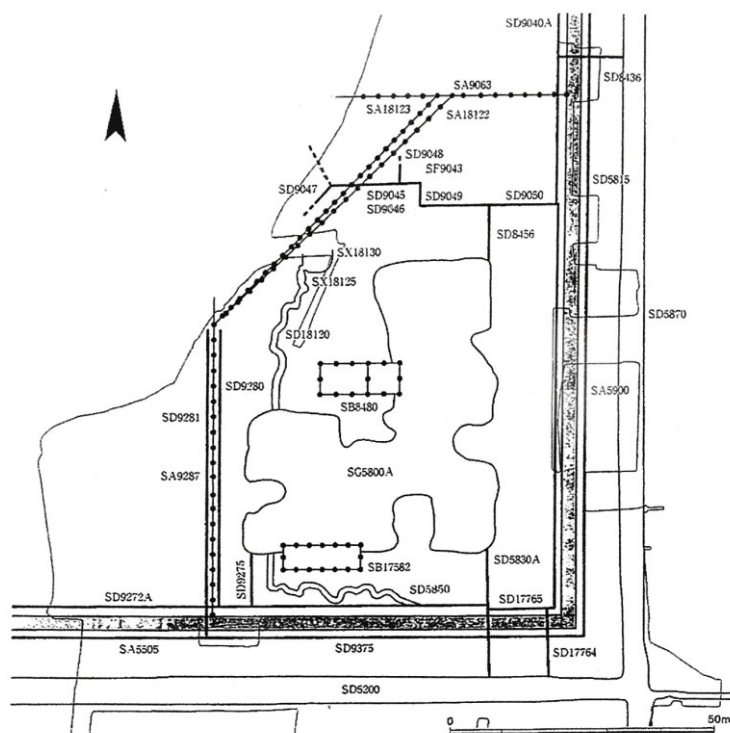


図 15 下層園池

(「平成 15 年度古代庭園研究会」資料 p 354)



「平成 15 年度古代庭園研究会」資料（－奈良時代庭園遺構の検討－）により、残存した底石の材料、手法、側石の抜き取られた状況から推定し、池の南側、西側に 2 条の蛇行溝は下層園池にともなうことが確認できた<sup>(35)</sup>。(図 16、図 17)

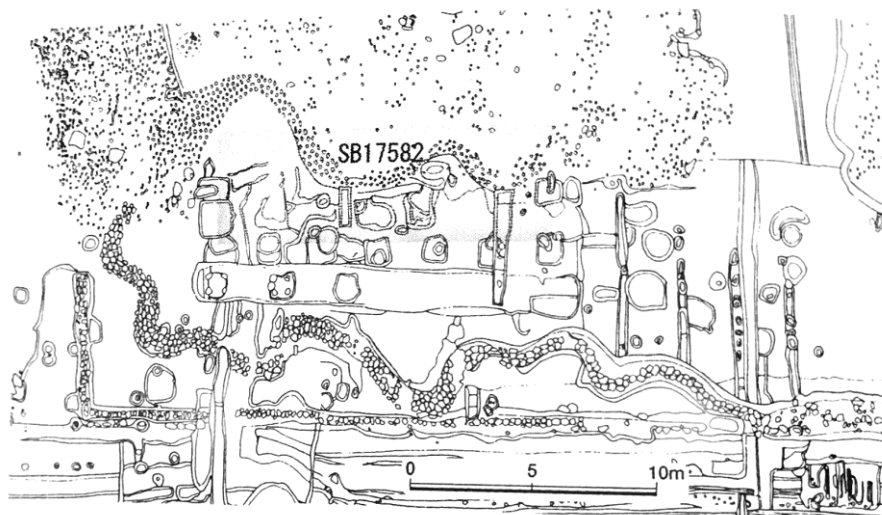


図 16 東院庭園南蛇行溝

(奈良大学『シンポジウム いま探る古代の庭園』2000 より)

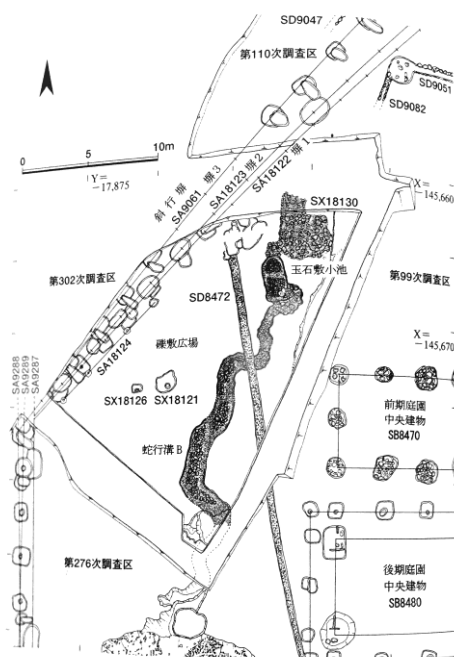


図 17 東院庭園西蛇行溝

(奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報』2000－Ⅲ 2000 より)

南蛇行溝 (SD5850) は 1967 年第 44 次調査、1980 年第 120 次調査で発見された<sup>(36)</sup>。池の南岸と南面大垣のあいだにある。池の西南からはじまり、南面大垣の北側を蛇行しながら、大垣に近付きつつ東にながれ、蛇行部分はほぼ 39m であり、途中、少なくとも 12 回は屈曲する。90 度に近い大きな屈曲点が 8 か所ある。側石はほとんど抜かれていたが、底石は良好な状態で残っている。底石は径 20~40cm の平たい玉石を 2~4 列、両側が高く中央が低く、皿状を呈するように敷いたものである。側石は上流部にわずかに残る。この部分に基づく、側石は底石より小さく、径 10~15cm の玉石を、皿状に迫り上がってきた。底石よりも 5cm ほど高く立っている。溝底中央部の縦断勾配は約 0.5% である。側石を含めて幅 90~150cm、深さ 15cm ほどに復元できる。残念ながら、下層園池と南蛇行溝の接点は石が抜かれたため、ここには水量調節の施設があるはずであるが、その構造は明らかになっていない。

西蛇行溝 (SD18120) は 1999 年第 302 次調査で発見された<sup>(37)</sup>。池の西北側にあり、溝の構造、遺存状況が南蛇行溝とほぼ同じである。西蛇行溝は北東から蛇行しながら南南西に流れる。流れは 24m であり、9 回で屈曲する。90 度に近い大きな屈曲点が 6 か所ある。底石も良好な状態で残り、側石はほとんど抜かれていた。発見した蛇行溝の南北両端での溝底中央部における敷石上面の高低差は 9cm であり、縦断勾配も同じく約 0.5% である。底石は径 20~40cm の上が平らな玉石を 3~4 列、幅 70~80cm に、両側が高く中央が低くなる浅い皿状に敷かれている。中国の例では約 12cm/s と比べ、西蛇行溝の流速は約 20cm/s となる。側石を含めて幅 110~150cm、深さ 10~15cm ほどに復元できる。

しかし、南蛇行溝がなく、西蛇行溝の上流部に二つの施設 (SX18125、SX18130) が発見された (図 15)。いずれも浄水施設と考えられている。「奈良時代庭園遺構の検討」により、SX18125 は、東西 1.5m、南北 3m の小判形に径 5~15cm の比較的にごつごつした石を詰めて敷き込んでいた施設である。外周りの石の残存状況が悪く、推定の域を出ないが、東側には外周に沿うように幅 20~30cm の帯状に地山が高くなっている面があり、この上に縁石が巡れば、内部は玉石敷き小池となる。SX18130 は SX18125 の北に広がる玉石抜き取りの集中部分で

ある。南の玉石溝部よりも幅広く石が敷かれていたようであり、小さな小池がここにあったかもしれないと考えられる。復元図から想像すると、北の給水路から導いた水を一旦 SX18130 に留め、ここから SX18125 に水を入れ、ここで石の間を通しながら、水を浄化し、曲流の玉石溝に流すという構造である。

最下層園池から下層園池の変換に関する特色は水深が全体的に浅くなっていることである。また、園池の平面形が屈曲する自然形となり、蛇行溝をともなうことが最大な特色である。池の水深は最下層園池でも全体的には 20～30cm と浅いのであるが、東南部は 60～80cm もの深さがある。下層園池では北部の浅いところで 5～10cm であり、南部深いところで 30～50cm である。

東院の池に付属する両蛇行溝は、極めて珍しいものといわれていた。牛川喜幸氏の 1993 年の説により、蛇行の有無にかかわらず、庭園に設けた流れを分類すると、幅が一定の人工的な「流杯型」と、幅が不定で自然な流れをまねした「遣水型」がある。今のところでは、「流杯型」は 7 世紀に多く、東院庭園の蛇行溝がある「遣水型」は新しい。東院庭園とくに後期庭園は日本庭園の原型と評価されたが、蛇行溝はそこに残った重要な古い要素であるとみられる。

高瀬氏の説により、「奈良時代の曲水宴は必ずしも流れに沿って座するという形式ではなかった。東院庭園の南の蛇行溝は東西棟建物と南面大垣に狭隘な場所にあり、ここで曲水宴が行われたと仮定すると、ここでは流れに沿って座することはむずかしい。また、『続日本紀』では曲水宴を行った場所は一定せず、さまざまな場所があり、なかには自然の川辺（博多川）や靱負御井といった場所もある。その他、鳥池塘、新造池亭など、流れではなく池辺で行ったことを思わせる記録もある。」<sup>(38)</sup> ということも明らかになっている。

下層園池にともなう両蛇行溝は曲水流觴のために作られた水路なのか、それとも単に屈曲する水路なのか、という問題がある。同種の遺構が日本の飛鳥時代以前はもちろん、中国、朝鮮半島にも残っていないが、結論を先に言うと、曲水流觴に使われた可能性が高いと考えられている。前述のように、主水路から両蛇行溝への給水量はいずれも調整できることを示している。そして、玉石を敷いた両蛇行溝の縦断勾配は約 0.5% であり、流速は 20cm/s となる（高瀬計測）。流れに要する時間は、北蛇行溝の下流部が壊されて正確的に復原でき

ないが、およそ2分半であり、南は3分である。両蛇行溝は給排水が主要目的ではなく、池の北のあるのも、南にあるのも、あくまでもデザインされた水路として造られている<sup>(39)</sup>。しかし、両蛇行溝は曲水流觴のために用意されたとする、二箇所で行ったのであろうか。二箇所で行ったとしても、両蛇行溝は離れており、そこを流れてくる杯を同時に眺めることは難しいであろう。また、図17のように、西蛇行溝の西側に礫敷広場があり、両側に幅5~10mの空間があり、ゆったりした配置である。流れに沿って座ることは可能である。中国の古典にのっとり、東のほうの川に向かって西側から行事を行ったのであろう。南蛇行溝は南面大垣と東西建物の間に挟み、溝の両側には幅2~3mの空間しかない。流れに沿って座ることはむずかしいと見られていたが、この建物から眺めることは可能であろう。ここから考えると、晴れる日ならば、西蛇行溝を使い、屋外で曲水流觴を行ったが、雨の日に、文人はこの建物の中に座り、南蛇行溝を使い、曲水流觴を行ったのかもしれない。

奈良時代の皇族・貴族にとって、庭園は彼らが憧れた神仙世界であったが、庭園内で行った宴会は琴をはじきながら、酒を飲み、詩歌を詠む楽しさは古代中国貴族をまねて神仙の境地に浸るという意味があった。曲水の発見は、東院庭園におけるそうした行事の姿を具体的に想像されると考える。

一方、奈良時代の曲水之宴ではどのぐらいの人数が参加したのであろうか。上述の史料のみから推定することはできないが、東院庭園の両蛇行溝の長さと同様の空間から考えると、多くの貴族・文人が参宴することはきびしいと考える。『なら平城京展98』により、奈良時代に五位以上の貴族は百数十人と言われている<sup>(40)</sup>。これらの人々と宴会を支える人たちが全員曲水流觴に参加すると、分散したとしても相当的な密度であったと考えられている。やはり、曲水流觴の詠詩に参加した貴族や文人のみが東院庭園の蛇行溝のそばに座り、杯を流し、宴会を楽しみ、それ以外の貴族は別の宮殿で宴会を行ったと考えるのが妥当であろう。

また、奈良時代の杯というと、基本的には直径12~15cmの大きな漆器であり、羽觴で鳥形や耳杯のようなものがない。その重くて大きな杯は両蛇行溝に流れるのかという疑問が残る。

さらに、史料によって記載されなかった例もあるのであろうが、曲水流觴は奈良時代を通じて行われていたと言えよう。藤原宇合・長屋王など貴族も私邸で行っていたようだ。桓武天皇（在位 781—806 年）の時代には頻繁に行われたが、次の平城天皇（在位 806—809 年）・嵯峨天皇（在位 809—823 年）以来中断し、宇多天皇の寛平 2 年（890 年）に復活した。しかし、宮廷の年中行事としての性格はだんだん薄くなり、貴族の藤原道長（966—1027）、藤原師通（1062—1099）などの貴族や風流人士の遊びの宴会として続いた。

### 3.4 平安時代の曲水と遣水—毛越寺を例として

榎村氏の説によると、平安時代に曲水流觴は遊樂の性格が強まり、また毎年行われることもなくなったようである。『日本後記』には 3 月 3 日宴について以下のように記録されている<sup>(41)</sup>。

- ① 延暦十一年(792 年)三月丁巳(3 月 3 日)、幸南園禊飲、命群臣賦詩。賜綿有差。
- ② 延暦十二年(793 年)三月辛巳(3 月 3 日)、禊于南園、令文人賦詩。五位已上及文人賜祿有差。
- ③ 延暦十三年(794 年)三月丙子(3 月 3 日)、宴於南園。賜五位已上祿有差。
- ④ 延暦十五年(796 年)三月甲午(3 月 3 日)、宴侍臣。賜祿有差。
- ⑤ 延暦十六年(797 年)三月己丑(3 月 3 日)、宴侍臣、奏樂。賜祿有差。
- ⑥ 延暦十七年(798 年)三月癸未(3 月 3 日)、宴五位已上、命文人賦詩。賜物有差。
- ⑦ 延暦二十三年(804 年)三月戊寅(3 月 3 日)、宴侍從以上、命文人賦詩。賜物有差。
- ⑧ 大同二年(807 年)二月辛巳(3 月 3 日)、詔曰。朕孝誠有闕。奉親無從。橋山崩心。仰遺劔而已遠。穀林茹恨。望遊冠而何及。況復春風動樹。結蓼思於終天。秋露霑叢。貫棘心於畢地。夫三月者。先皇帝及皇太后登遐之月也。在於感慕。取似不堪。三日之節。宜從停廢。

上記の史料からみると、大同二年(807年)の停廢までには曲水流觴が奈良時代以来の性格を持って続いていたようである。天皇が毎年3月3日に、南園で宴会を行い、文人たちに詩歌を詠ませていた。曲水流觴の特色としての屈曲した流れ、詠詩をともしない罰杯はここではまったく触れていない。この後、榎村氏の史料から曲水流觴が行われた場所と流杯の流れについて指摘すると、以下のようなになる<sup>(42)</sup>。

- ① 康保3年(966年)村上天皇主催、場所は内裏清涼殿の庭(仙華門の内)、文人等が御溝辺座に就く。

清涼殿の庭だとすると、白砂敷の平庭の可能性があり、御溝辺座の溝はどのようなものか。今でも京都御所には御溝水という流れがある。しかし、御溝水は切石で造られた直線的な流れである。御溝辺座の溝も直線的な溝であろうか。

- ② 寛弘4年(1007年)藤原道長(関白)主催、上東門第(土御門殿)、「東渡殿板流。」

東対南庭付近を流れていた遣水であろうか。

- ③ 寛治5年(1091年)藤原師通(内大臣)主催、六条水閣、「羽爵流水庭前流上樹下、引廻屏幔為酒部所也。」

羽爵を流したのは庭前流であったが、これも遣水であろうか。

- ④ 元久3年(1206年)藤原良経が計画したが未実施の曲水宴、「南庭西行新可掘溝之由。」

南庭に新しい溝を掘ったが、これは遣水様の溝であろうか。

以上の4件の史料からみると、平安時代に、天皇の場合、曲水流觴が行われた場所は内裏であり、貴族の場合、曲水流觴が行われた場所はそれぞれの邸宅である。いずれも寝殿と前庭を中心とする空間である。そして、流杯に用いられた流れは遣水の可能性が高いと考えられている。

遣水というのは、屋敷内の水源から池泉に注ぐ曲線状の水路のことである<sup>(43)</sup>。平安時代の寝殿造り系庭園から始まったといわれている<sup>(44)</sup>。「寝殿造

り」は平安時代に生まれた貴族の住宅様式である。これは居間に当たる「寝殿」と呼ばれる建物を中心に、「対屋」と呼ばれる個室群と「渡廊」と呼ばれる通路で構成されていた。この寝殿造りは南の池を中心とした庭園と一体となり、庭の部分は「寝殿造り系庭園」とも言われている。寝殿と池は渡廊で結ばれ、その先端に池に突き出した「釣殿」（納涼を目的とした空間）という屋根と床だけの吹きさらしの建物が設けられた。池には必ず「三神仙島」と呼ばれる三つの中島を設けることが常とされた。中島は橋で結ばれ「遣水」と呼ばれる水路を通じて東北から水が引かれた<sup>(45)</sup>。ここでは典型的な寝殿造である東三条殿復元模型（京都文化博物館）を取り上げた（図18）。



図18 東三条殿復元模型

(京都文化博物館)

- ①寝殿 ②北対 ③細殿 ④東対 ⑤東北対  
⑥侍所 ⑦渡殿 ⑧中門廊 ⑨釣殿

平安時代には、中国の儒教・道教の思想や、仏教の天台宗・真言宗、そして浄土教などが取り入れられ、現世的な歓楽主義も鮮明に浮かび上がってきた。また、平安京は湧水が豊かで、多くの貴族は邸内の湧水を水源にし、そこから

水を引き、池泉に流し込んだ。これをまね、毛越寺も鶴と亀の池泉構造となった。古代の中国で鶴亀は長寿と繁栄の象徴であり、「鶴は千年、亀は万年」と言われ、めでたいものとされ、鶴亀の思想も日本に伝わった。したがって、その時期の貴族生活は享楽であり、寝殿造りや池の特徴からもこれがわかるであろう。

上述史料とほぼ同じ時期に書かれた『作庭記』は、平安時代における最古の庭園書であるとみられる。『作庭記』によれば、「遣水は宅地の外より引き入れた水流を、自然の落差によって溪流や河川の景趣に擬えて造るもので、潺溪とも呼ばれ、寝殿造の庭園には固有の局部である。普通は北東より取り入れて、寝殿と対屋との間を通し、廊をば反渡廊の形式として、その下を潜らせ、束柱を支える束石などには、特に選ばれた立派な庭石を使って、景趣を整えるのであるが、勾配のある時には、瀑流として、小瀑などをも造り、或は中洲や中石などを置き、或は洲浜ようの入江を構えなどして、変化を作る。遣水を渡るには沢飛や石橋や勾欄橋などを渡して、それも情趣を添える手段とする。橋の袂には、所謂袂石といったような目だった石を使う。水流は弓なりに緩やかに曲げたり、水は電光形に打ち曲げたりして、趣を深くするのであるが、ここで曲水宴を催すこともあって、そのためにも用意することがある。遣水は結局池に注ぐのであって、水流の方位に就いては、東の方から注いで、西の方へ流して、宅地の外へ放流するのが、宅相上よいとせられている。又遣水の一部を拡げて、池ように造り、池を省略することもあったようである。遣水の立石に添えて、軽い前栽が設けられるのも常である。<sup>(46)</sup>」とある。

『作庭記』と『図解庭師が読みとく作庭記』には遣水の手法について詳しく述べていた。筆者は遣水を流す条件を以下のようにまとめる。

まず、遣水の確立のことである。遣水を流す水の上流方向を決めなければならない。「東から南に向けて、西へ流すのを順流とする。西から東へ流すのを逆流とする。だから、東から西へ流すのが通常である。」また、「四方を司る天の四神は東の青竜、西の白虎、南の朱雀、北の玄武からなっている（図 19）。東方向から家屋の下を通して、西南方向へ出すのがもっとも吉である。」<sup>(47)</sup> 青龍の水で、諸々の悪気を白虎の方へ、洗いだせるからである。したがって、遣



水も寢殿の東から出て南に向け、西へ流すべきである。



図 19 四神相応

(『図解庭師が読みとく作庭記』 p83)

さらに、「遣水が湾曲する凹の内側を龍の腹とす。住まいをその腹に当てがうのは吉である。背に当てがうのは凶である。」<sup>(48)</sup>と書かれている。(図 20)

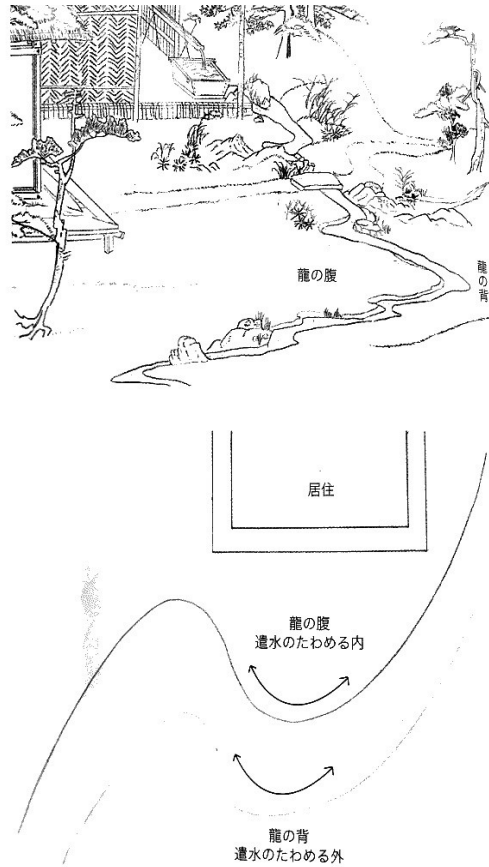


図 20 遣水と住まい  
 (「法然上人絵伝」 p150)

古代中国に端を発する自然哲学思想の陰陽五行学により、北方は水であり、南方は火である。陰によって陽にお互いに対抗し、影響を与え合うことができると考える。そのような屋敷の主人は、体も心も楽になり、長生きすると信じられている。庭園において曲水流觴を行う場合も、順調に進められると考える。

次に、遣水の勾配のことである。水を流そうとする場合、勾配をつけなければならない。『図解庭師が読みとく作庭記』によると、「一尺下がるごとに三分、一丈なら三寸、十丈なら三尺の割合で勾配を下げると、水がせせらぎ流れるのに支障がない。また、水源が思ったより高い場所にあるようなら、勾配を計る必要がない<sup>(49)</sup>」と書かれている。

一方、ここで注目されたのは奈良時代東院庭園蛇行溝 0.5%の勾配と比べ、『作庭記』では流れの勾配は 3%がよいと書かれている点である。3%の勾配は

結構急であり、かなり速い流れであったことがわかる。この 3%勾配は毛越寺の遣水遺構などに近い数値である。したがって、遣水が曲水流觴に用いられたとすると、杯は速いスピードで流れたにちがいない。この面からも平安時代の曲水流觴は奈良時代と比較してやや異なる趣味を持っていたことが明らかになったと思う。

そして、石の配置のことである。「石を立て始める場合、遣水が透渡殿から出るところ、山の突き出た部分を巡るところ、あるいは遣水が池に注ぐところ、遣水が折れ曲がる場所など、石をまず一つ立て、多くても少なくとも必要ならば、左右に添え石をする。そして、水が強く当たるところにも石を立てるのが必要である。ただし、曲がった部分は前後に重なって見えないように、立てるべきである<sup>(50)</sup>」と指摘されている。(図 21、22)

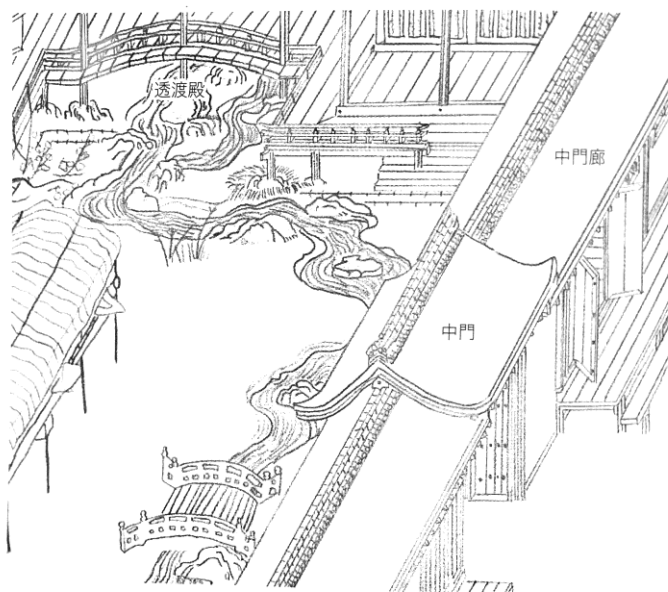


図 21 遣水の姿  
(「年中行事絵巻」 p26)

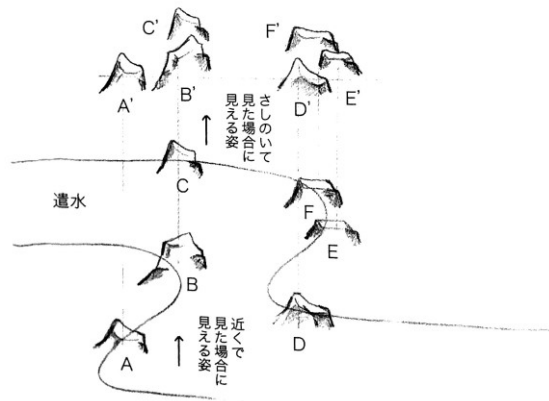
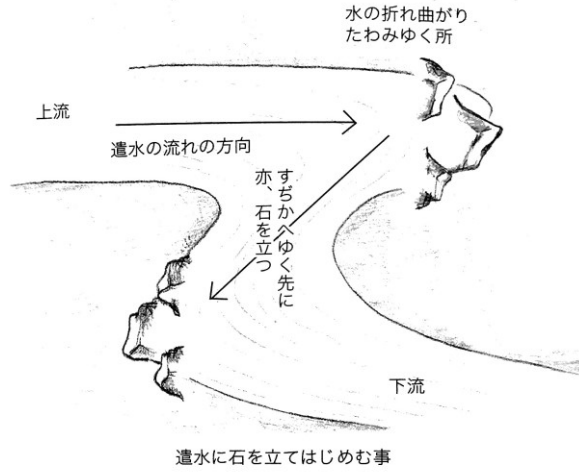


図 22 石の配置

(『図解庭師が読みとく作庭記』 p95)

土は石があることによって磐石となる。石がない場合、水によって崩される恐れがあるのであろう。そして、このように行き違い行き違いに水を落とし、あちこちに水が白くなっているところを見せるのがよいと考える。(図 23)

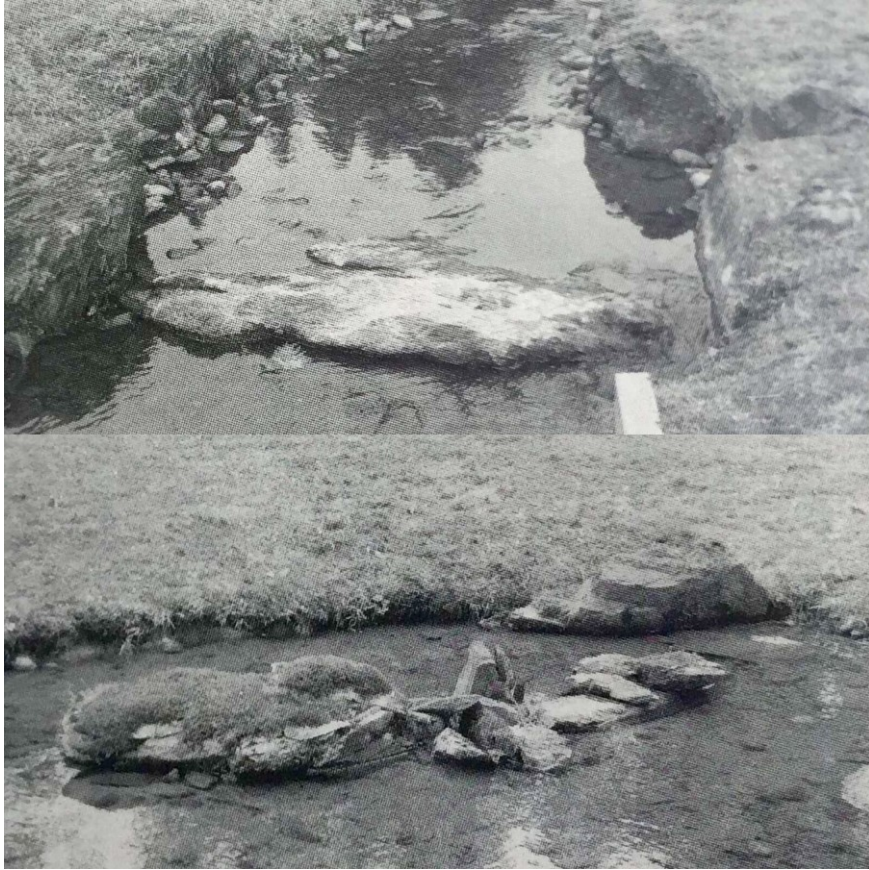


図 23 毛越寺石立ての一部

(『図解庭師が読みとく作庭記』 p101)

『作庭記』では、遣水の手法に関することについては詳細的に書かれているが、曲水流觴のことはまったく触れられていない。しかし、『作庭記』は作庭のために述べた書であり、庭園の利用方法などソフト面については基本的に触れられていない。曲水流觴に関する記録がないからといって、これを根拠として、遣水が曲水流觴に利用された可能性が結構高いといっても言い過ぎないであろう。

さらに、『西宮記』は平安時代に左大臣源高明（914～982）によって撰述された有職故実であり、毎年の恒例行事を1月から12月まで月ごとに配列した「恒例」と臨時に発生する行事について記した「臨時」に分け、平安時代における曲水流觴のことについても詳しく書かれている。榎村氏は、『西宮記』で天皇主催の曲水流觴の次第を以下のように指摘している<sup>(51)</sup>。

- ① 天皇出御
- ② 上卿や公卿が参上
- ③ 紙筆文台等が用意される
- ④ 天皇から題が献される
- ⑤ 題が奏進され、また題が文人に給される
- ⑥ 肴物三献を賜り、初めて声を発す（乾杯）→この部分が『康保三年三月三日御記』では「流杯溝水」、杯を溝に流すという表現に変わる。
- ⑦ 文台を取る=詩を詠む
- ⑧ 講師が出来上がった漢詩を身分の低い者から順に詠む
- ⑨ 天皇が作った詩を講師が詠む
- ⑩ 諸卿が本座に帰り、禄、賜りものをもらう

以上からみると、曲水流觴を参加するのが非常に限られた人間であり、参加者が情報を共有し、公卿・王卿たちは観客として扱うことが分かった。講師が出来上がった漢詩を身分の低い者から順番に詠み、最後に読み上げたのは天皇の御製である。つまり、天皇主催の曲水の基本は、文人たちと天皇が漢詩を読みあうということである。しかし、『康保三年三月三日御記』では「肴物三献を賜り」ところを「流杯溝水」のように杯を溝に流すという表現に変わった。このようにみると、日本における曲水流觴は奈良時代以来、日本独自のものを加え、より中国の教養に基づいた儀式として行われてきた。

日本における曲水流觴の特色というと、当初は祓禊から始まった宴会遊楽のほうへ変化する中国の曲水流觴と比べ、祓禊の要素はあまりなく、宴会遊楽として行われた場合がよくみられた。奈良時代には曲水流觴は年中行事、祭祀としての色彩が強く、政治的な性格を持っていた。平安時代に入ると貴族の邸宅などでも盛んに行われるようになり、一種の教養試験であり、また遊楽としての性格が強まっていた。榎村寛之氏の説により、平安時代にも上巳の祓禊、3月3日の祓禊自体は存続していた<sup>(52)</sup>。しかし、それは曲水流觴とまったく切り離れられ、川や海など、家の外で行われた別の行事である。つまり、日本に

において、元々川禊があったので、中国から伝入した曲水流觴の基礎になったのであろう。

遣水は曲水流觴から発展、変化したが、逆に、遣水が曲水流觴に利用されるものとも言われている。『歴史とを愉しむ日本庭園鑑賞のポイント 55』により、平安時代における貴族庭園では、池のない庭でも遣水だけは必ず設けられたとされる<sup>(53)</sup>。それは、当時の貴族の庭園の利用方として、曲水流觴があったからと考える。

近年の発掘調査により、毛越寺の庭園造りや、遣水などが平安時代作庭方法の教科書『作庭記』に沿って作られたものであると考えられる。筆者は、平泉毛越寺へ現地訪問と、文献資料も組み合わせ、毛越寺の重要性と独特性を把握した後、毛越寺を対象地として選定した。ここでは毛越寺の時代背景、遣水遺構の必要不可欠性、庭園内遣水と曲水流觴の関係、現代曲水流觴の再現・価値などを分析・考察し、多面的に把握する。

平泉は、岩手県の南西部にあり、現在の平泉町の中心部にあたる。11世紀後半、繰り返した戦乱を生き抜いたため、奥州藤原氏4代は、現世の仏国土（浄土）の実現を目指して独特な政治、文化上の拠点を生み出した。毛越寺は2代藤原基衡によって建立され、3代秀衡によって完成された。13世紀から16世紀の間に伽藍は全て焼失し、現在は庭園遺構だけが残されている。昭和54年より毛越寺庭園の調査と保護を目的とした文化庁の長期発掘整備事業が始まり、3年目の昭和57年、遣水の一部と落とし口らしき石組が発見された。翌年にかけて調査が進められ、その流れには「底石」「水切り石」「爪石」「横石」「水越石」などが『作庭記』のような忠実な形で発掘され、長さ約80m、幅約1.5mで全国最大規模の完全な遣水の姿を優美に残している。毛越寺の遣水は平安時代の唯一の遺構として、当時の状態をほぼそのまま留め、全国的にひいては世界的にも極めて珍しいものだとされ、東洋一とも言われている。平成23年6月25日に平泉の毛越寺が世界遺産に登録された。

昭和60年4月に、調査整備委員会や関係者が見守る中、はじめて流れに水を通す「流しはじめの儀」が開かれ、水面に桃の花びらを散らし、平安のせせらぎがよみがえった<sup>(54)</sup>。また、見事な遣水であり、屈曲部から土器片が多数的に発見されたことなどから、委員会から曲水流觴を再現してはどうかとの提

案がなされた。実は、毛越寺には曲水流觴を行った記録はまったくないが、遣水のそばに立ち、せせらぎの音に耳を傾けると、この庭園が800年有余を経てまだ生き続けている状態を実感し、平安時代の遺構として、国内に例のない遣水でこそ曲水流觴再現の意味を深く持っていると考えられる。

続く昭和61年5月、「藤原秀衡公・源義経公八百年御遠忌大祭」の年に曲水流觴が始められた。しかし、曲水流觴を開いた記録がまったくなく、資料も乏しい状態であり、すべてのものは零から始められ、衣装道具などを準備することとなった。実際に曲水流觴を再現することは難しいことであったが、有職故実研究の猪熊兼勝氏や黒田装束店、宮中歌会披講会の城俊成氏などからの指導により、試行を繰り返した。最初の曲水流觴は、山つつじが咲いている時期に、多くの関係者や観覧者が見守る中、開催にごきつめた。毛越寺の曲水流觴は現在も行われている一種の親水イベントとして、世界遺産にふさわしい貴重な行事であるとする。

現在毛越寺の曲水流觴は新緑が輝く毎年5月の第4日曜日に行われている。男性は衣冠や狩衣、女性はうちぎ、十二単など平安貴族さながらの盛装を身にまとして参宴する(図24)。『毛越寺曲水の宴』改訂版によると、毛越寺の曲水流觴の次第を以下のように整理できる<sup>(55)</sup>。

- ① 本堂参拝
- ② 開宴の辞
- ③ 歌題披露
- ④ 催馬楽、延年舞(図25-I、II)
- ⑤ 流觴曲水(図26)
- ⑥ 一觴一詠(図27)
- ⑦ 御酒拝載(図28)
- ⑧ 短冊集め
- ⑨ 講師披講(図29)





狩衣  
【かりぎぬ】



衣冠  
【いかん】



十二単  
【じゅうにひとえ】



桂  
【かぎ】



水干  
【みずかん】



直垂  
【ひたれ】

図 24 毛越寺曲水流觴の衣装  
(『毛越寺曲水の宴』 p30)



東京小野雅楽会 / 催馬楽奉奏

図 25- I 催馬楽の奉奏  
(『毛越寺曲水の宴』 p8)



図 25-Ⅱ 延年舞の奉納  
(『毛越寺曲水の宴』 p8)



図 26 羽觴を流す  
(『毛越寺曲水の宴』 p9)



図 27 一觴一詠  
 (『毛越寺曲水の宴』 p12)



図 28 御酒拝載  
 (『毛越寺曲水の宴』 p12)



図 29 講師披講  
 (『毛越寺曲水の宴』 p13)

具体的には、参宴者と関係者たちが南大門から着場し、本堂を参拝した後、竜頭鷓首の船に分乗し、管弦奏楽のうちに大泉ヶ池の対岸に移動する。主催僧・典儀・披講所役の五人は、遣水の上流近くに設けられ、床机に着席する。主賓歌人を含めた六人の歌人たちは遣水をはさみ、決められた水辺に着座する。「水際の主は自然の神々の在すところ」と所役が披講する。そして、主催僧が開宴のあいさつをした後、十二単が所定の位置に参進し、歌題を読み上げる。歌題披露の後、雅楽『催馬楽』にあわせ、重要無形民俗文化財の毛越寺延年の舞「若女の舞」が奉納される。おわって主催僧が水辺に参進し、杯を乗せた蓮の花形の羽觥が遣水に流される。羽觥は蛇形する遣水の上を、時々童子が竹のさきで誘導しながらながれてゆく。そばに座った歌人たちはそれぞれ歌題にしたがい、思いを練って和歌を一首読み、流れてくる杯を傾ける。こうして、童子が六人の歌人方の詠んだ歌を集め、講師が中央舞台に置かれた円座に座り、文台の前で歌人の短冊にしたためた和歌を披講し、終宴となる。

毛越寺の曲水流觥の再現は深い文化価値をもっていると考えられたが、以下の①②③のようにまとめられる。

#### ①装束調度

男性の装束の代表のひとつは衣冠である。衣冠は平安時代宮中で正装の束帯に準じ、着用された略装である。平安時代末期以降取り扱いが複雑な束帯は禁中行事用になり、日常の参内には一般的に衣冠を用いることが多く、男性を代表する装束の一つである。神社界における、衣冠は正装であり、狩衣姿が常装であったが、武家の場合、その狩衣は正装として用い、公家は略装として用いた。歌題披露する女性が着ているのは十二単である。十二単は平安時代以降の女房装束であり、単と袴の上のうちぎを12枚重ねて着る姿である。桂は女官が正装を表着のときに着用した服装であり、重い儀式のときも日常の場合にも着用したものであり、実用面からみると、その時代の基本的な装束である。そして、童子役の装束は水干姿である。平安時代の末から無位の官人が着用したが、武家時代には礼装となり、ついに公家も内々用いるようになった。特に幼少者の場合、童水干と呼ばれる。また、例として、曲水流觥に利用される杯も

平安時代に用いられた鴛鴦の姿また蓮の花形の杯台に載せ(図 30)、流れてゆくものである。すべての装束、調度は古代より伝わった有識故実に即して注文用命されたものである。曲水流觴により、伝統的な装束調度を次代に伝えることができるかと信じられている。さらに、平安時代の一種遊びの姿をそのままに再現し、宴会に侍る人も、周りに観賞する人は、昔の王朝みやびを深く感じさせられるだけでなく、この遣水を造成し、命がけに後世に残してくれた基衡公をはじめとするゆかりの名匠たちにも限りない感謝な気持ちを持つのであろう。



図 30 平安時代の羽觴  
(『毛越寺曲水の宴』 p14)

## ②浄土思想

浄土思想とは、死んだ後に清い世界である仏の世界に行き、成仏出来るようにしようという考え方であるが、日本においても、奥州藤原氏等の有力者が支持したため、10世紀～12世紀にかけて浄土思想の人气が大きく高まった。毛越寺は国の「特別史跡名勝」と指摘されていた。特別というと、この庭園が「此土浄土の旧観」を理想的に留めていたと思っている。大泉ヶ池に竜頭鷓首の船を浮かべ、詩歌管弦の遊びを行うことを通じ、そのままに平安時代の天人歌舞楽の元、浄土万代の至福思想にあずかった意味があるであろう。毛越寺の遣水もこの「此土浄土」の「四神相對の聖域」における、「和歌祭りの遺構」として後世に伝わった。浄土教文化の中の宗教の生活化、趣味化という視点を考えれば、曲水流觴は此土浄土の平安を無窮にたたえていく。さらに、現在毛越寺

の曲水流觴は「特別史跡名勝」における、特別な遊び様式を利用し、世人を驚かされた「歴史の現実」ということになった。それは日本人の美的感覚と宗教様相の融和調和の極致ともみられる。

### ③和歌吟詠

奈良時代に曲水流觴を行うとき、漢詩を競うこととは違い、平安時代に入ると、和歌を詠むことになった。和歌の披講というものは乞巧奠や重陽宴や宮廷歌会などの始まりと同じく、平安時代中期に完成した形式である。その歴史的な価値が大きいのみならず、現代的な意義にも大きなものがあると考ええる。

「和」は二つ以上のものを「和える」「合わせる」といい、「和歌」の場合、声を合わせる歌となる。声を合わせるには、心を合わせなければならない。だから、和歌は心を合わせるものであり、人と声と息と心の調和したものである。

『古今和歌集』の仮名序により、「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。<sup>(56)</sup>」と書かれている。ここでは、和歌の生まれたもとは、人の心とされている。その心とは、山川草木の輝きや揺らぎにも共鳴し、鳥獣虫魚の鳴き声とともに歌を生み出す心である。この和歌の本質は人間や動物や植物など生きとし生けるもの、さらにすべての天地自然万物との平和と繁栄の共生原理である。また、和歌が日本語の歴史のあらゆる時代を通じて洗練されてきたものであり、文字を目で読まれるだけでなく、声に出して歌われることにより、その歌が美しいかどうか、力のある言葉であるかどうかなどがよく考えられ、そして鍛えられ、磨かれてきたものである。しかし、いつの間に、現在の短歌は黙読され、その内容意味を理解させるだけで終わり、文字だけのものとされるとされることが多くなってきた。それで、現在の短歌は生き物の命の息吹や心を動かす力を失ってきたと考えている。和歌の美しい力を取り戻すため、曲水流觴の再現は欠くことができない意味を持って

いると考えている。

昭和 61 年、曲水流觴再現の初めての歌題は「水」である。ここで当時六人の歌人の歌（①～⑥）を取り上げる<sup>(57)</sup>。

- ①「山のかげ 池にうつして 静かなる けふも暮れなん 春の夕映え」(太田俊穂 日本詩歌文化館館長)
- ②「よみがべる 水のほこりに 侍ひて 今日の宴に 歌たてまつる」(森山耕平 岩手短歌会)
- ③「遣水の 水の面に くれなるの つつじは映れり いにしへのごと」(高橋爾郎 岩手短歌会)
- ④「萌え出でし 草生を浸す 遣水に 杉の木立の 影静かなり」(村上圭吾 岩手短歌会)
- ⑤「大賀蓮の おどろきに似て 清らかる 水いま息吹き 新緑を呑む」(志賀かう子 随筆家)
- ⑥「風光る 大泉の池に そそぎゆく この遣水の 音のかそけき」(斉藤いさ子 岩手短歌会)

すべての和歌は披講師により、「五七五七七」のように一句づつ区切って読み上げられる。遣水例を挙げた和歌を見ると、最初の歌題は「水」であり、水に親しむことだけでなく、歌人たちは自分を大自然に置き、「山」「風」「躑躅」と融合し、遣水のせせらぎの音に耳を傾けると、この庭園が 800 年有余を経てまだ生き続けている状態を心より実感したと考えている。その後、毎年の歌題は単字であり、「空」「緑」「花」「風」「雲」「鳥」などの具体的な大自然万物もあり、「音」「夢」「時」などの抽象的なものも含まれる。それらの簡潔して味わいのある歌題は人と自然とふれ合いの表現であろう。

#### 4. 酒船石遺跡と曲水流觴

上述のように、日本庭園における曲水流觴の受容と変化を検討した。現在まで日本における全ての発掘遺構は自然形水路であり、切石流杯渠のものは見つからないが、古代中国における主流である切石流杯渠は日本に伝わったのであろうか。日本における切石流杯渠は一体存在したのであろうか。本章では、奈良県高市郡明日香村大字岡の丘陵にある表面に 3 本の放射状の溝を持つ酒船石という石造物を取り上げ、その流杯石との関係を検討してみる。

この酒船石の用途について、灯油や辰砂の製造装置という説、長者の酒槽という説、天皇祭祀と考える説、また曲水流觴に利用される流杯石と考える説など、すでに江戸時代から多くの仮説が唱えられてきたが、いまだ確定していない。

『日本書紀』齊明 2 年に「香山の西より石上山に至る。舟二百隻を載みて、宮の東の山に石を累ねて垣とす」という記事がある。相原嘉之はこれまでの調査で、酒船石が 7 世紀中頃齊明朝に営造され、『日本書紀』齊明 2 年の「宮の東の山に石」に当たる遺跡であるということが指摘されていた<sup>(58)</sup>。この酒船石が曲水流觴に利用される流杯石であれば、これこそ日本ひいては東アジアに現存する最古の流杯石であるという説が成立することとなる。結論を先に記せば、この酒船石が曲水流觴を行うために造られた可能性が高いと考える。

まず、この酒船石遺跡の性格から考えよう。この酒船石は、全長 5.5m、幅 2.3m、厚み約 1m の石英閃緑岩巨石であり、上面に楕円と円形の窪みがあり、これを結ぶように幅 10cm の溝がつながっている (図 31)。



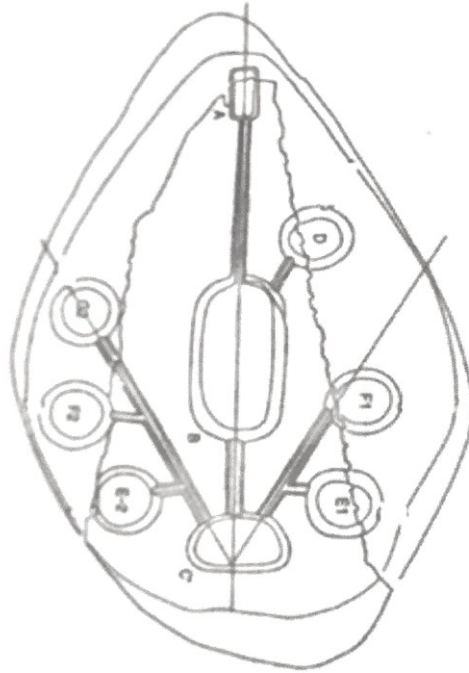


図 31 酒船石の想像復元図

(『酒船石遺跡発掘調査報告書』より、方向を 90 度転換)

劉海宇氏の『酒船石小考—東アジア現存の最古の流杯石の検討』によれば、この酒船石の想像復元図からみると、水溝の形は古代中国の篆書体「山」と「水」(図 32)によく似ている。「中間の窪みを境にして、下は「山」、上は「水」に見える」と書かれている<sup>(59)</sup>。



図 32 漢儀小篆体「山」「水」

(許慎 『説文解字』 p356、397)

劉海宇氏も北宋の宰相である夏竦の詩「觀唐明皇山水字流杯石応制」を引き、

唐代の玄宗皇帝が造った山水字流杯石の性格を示し、酒船石との関連を分析した<sup>(60)</sup>。

-前略-

霄垳奎躔布、龜圖洛畫浮。

偃波分密坐、垂露直前旒。

-後略-

-前略-まるで天辺に奎躔を布き、河図と洛書が浮いているようである。また偃波書体のように疎開に分布し、垂露書体のように垂らした旒がある。-後略-

ここでは、劉海宇氏は夏竦の「觀唐明皇山水字流杯石応制」の示したように、「霄垳は天辺のこと、奎躔は奎宿諸星の軌跡のこと、偃波と垂露は古代中国において漢字の書体名であろう。」と指摘した<sup>(61)</sup>。北宋の『雲台秘苑』には奎宿図が下図のように描かれている（図 33）。この奎宿図の右上部分に位置する王良五星は扇の骨のように放射状を示している。

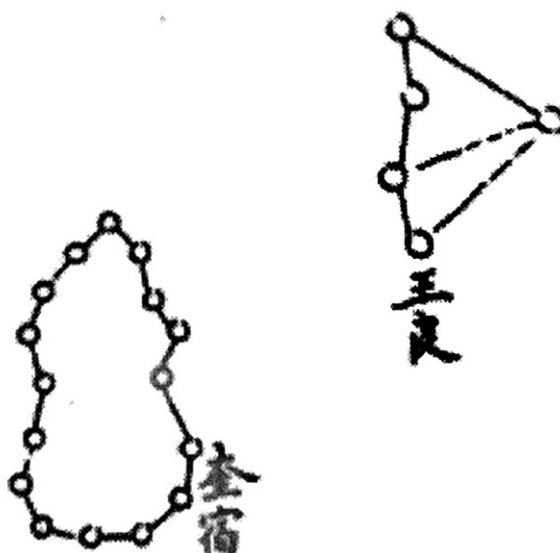


図 33 奎宿図

(北宋 『雲台秘苑』 11 世紀中葉)

そして、偃波書はすなわち版所であり、垂露篆は筆画の先端に露のしずくが垂れているような書体で、これはまた古代冠冕の前後にたらしした飾りの旒のような状態である（図 34）。

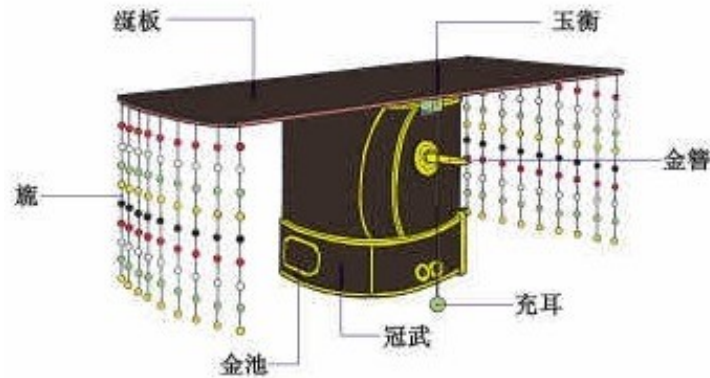


図 34 九旒冕主要組成部分示意图  
（『宋史・輿服志』 p39）

劉海宇氏の論文によれば、斉明朝の酒船石想像復元図を夏竦の詩と比べ、水溝の形は「山」「水」字が見られることだけでなく、下の三本の放射状の水溝は奎宿図の王良の星図にかなり近く、水溝の先に示した窪みは垂露書体のように垂らした旒のことに相似していると言われる<sup>(62)</sup>。

筆者は、劉海宇氏の見解が正しいと考える。実は、酒船石は古代中国の唐代から伝入して造られた可能性が高いと考えられる。前述したが、舒明年間から白雉・斉明年間にかけて、200 年以上の間に数回に遣唐使が派遣され、当時中国大唐の文化、制度、仏教などを日本に伝播されたことと関わっていると考える。

さらに、第 12、13、14、16 次調査により、北部地域石敷の中央には基幹排水路である南北石組溝が設けられ、その南端に亀形と小判形石造物と砂岩湧水施設が設置されたとされている。また、南端の砂岩湧水施設は、その中央に砂岩切石を 11 段口形に積み上げた取水塔があると指摘されている。水の流れは、取水塔から木樋などを利用して小判形石造物に水を落とし、その水槽に溜まった水は少量しか亀の口に流れない（図 35）。また、遺構の東西南に石垣で覆わ

れ、極めて閉鎖された人口的な空間と示されている（図 36）。相原氏は「斉明天皇にはじまり、天武・持統天皇と継続的に行われていた天皇祭祀の場所<sup>(63)</sup>」と指摘している。しかしながら、奈良時代の曲水流觴の特色からみると、曲水流觴が日本に伝わった当初は年中行事、祭祀としての政治的な色彩が強かったが、この北部地域の閉鎖空間で人を集め、曲水流觴を行ったとすると、また違った趣があったのであろうと考える。



図 35 酒船石遺跡北部地域調査遺構

(相原嘉之 「酒船石遺跡」 2000年 p27)



図 36 酒船石遺跡

(相原嘉之 「酒船石遺跡」 2000年 p28)

一方、「酒船」は『日本国語大辞典第二版』第五巻によると、「さかぶね」は「①酒を入れておく大きな木製の容器。②酒をしぼるのに用いる長方形の容器。この器に醪の入った多くの酒袋を入れ、押しぶたを押すと、底に近い側面の穴から酒が流出し、袋の中に酒の粕だけが残る。<sup>(64)</sup>」と二つの意味がある。この中で、①の意味は古代中国において酒を注いで飲む器具の杯と関連がある。古代中国における、一般的に曲水流觴に用いられた杯は木製または陶器製であり、小さくて軽量であるので、この意味から考えれば、酒船石は文字通りに酒の注ぐ杯を船のように水に流すための石と解釈したほうがよいであろう。

## 5. おわりに

### 5.1 まとめ

本論文は、曲水流觴を中心として、その時代背景と関連づけつつ、文献史料、発掘遺跡と照らし合わせ、古代中国の曲水流觴の系譜を整理し、また、日本庭園における曲水流觴の受容と変化を検討した。

第1章では、本論文の研究背景、研究目的と研究史を取り上げた。近年、都市化の発展に伴い、人口も大都市圏へ集中しつつある。都市における河川空間は、自然に触れられる貴重なオープンスペースの一つであると認められている。古代中国から始まった曲水流觴は、現代盛んに話題にされている親水イベントの古代的な手法であろうと考える。したがって、古代中国における「自然形水路」と「切石流杯渠」の曲水系譜を整理し、日本に伝わってから曲水流觴はどのように受容され、変化したかを明らかにした。これからも、古代中日における曲水流觴に関する問題と今後の課題を提起していきたい。

第2章では、古代中国における「自然形水路」と「切石流杯渠」の曲水系譜を整理した。すでに周代には三月上巳（陰暦三月初めの巳の日）に自然の流れに臨み、禊をし、汚れをはらい、水に流す祓禊礼儀があった。三国の魏の時代に、禊の日が三月上巳から三月三日に移されて定着した。そして、魏、晋時代に自然形曲水路が生まれ、そこで曲水流觴が行われた。その後、切石流杯渠が生み出された。ここで注目されるのは、古代中国においては自然形水路よりも切石流杯渠が主流であった点である。文献資料を検討した結果、魏晋時代から切石流杯渠系統の曲水が既に現れ、南北朝時代にもよくみられた。この間、本来の祓禊、祭祀儀礼から濃い雰囲気にもよみられた宴会遊楽に変化した。北宋李誠の『營造法式』にもう流杯亭の図式に関する記録があり、唐宋時代にきわめて盛行したことがわかる。明代に入って流杯亭は南北地域とも造られたが、清代には皇室専用の建築形式として発展したことが明らかになった。

その中で、東晋 353 年、文人王羲之が残した「蘭亭序」と 6 世紀中頃梁の宗懐が書いた『荆楚歳時記』が非常に重要な文献史料である。中国の唐代において、僧侶の鑑真は 6 度にわたり日本へ渡海しようとしたこと、また舒明年間から白雉・斉明年間にかけて、200 年以上の間に日本から数回遣唐使が派遣され

たことにより、「蘭亭序」『荆楚歳時記』などの文献も含め、当時の大唐文化が日本に伝入された。高瀬要一氏は『蘭亭序』が作り出した屋外に位置する「自然系」すなわち自然形曲水路が日本に定着したと指摘していた。しかしながら、『荆楚歳時記』において当時の民衆の行事や習俗を記録したが、詩を詠むことと罰杯のことはまったく触れられていない。内容表現のほうで、詠詩と罰杯を伴う王羲之の蘭亭曲水流觴とは異なっている。この『荆楚歳時記』が奈良時代に日本に伝来し、当時の教養の人に強い刺激を与えた。輸入当初からも祓禊習俗の要素がなく、流れに沿って風雅な宴会を行うこととして貴族社会の中に取り込まれたということを明らかにした。

第3章では、日本庭園における曲水流觴の受容と変化を追究した。日本における曲水流觴は7世紀後半から始まった。代表として、奈良時代の平城宮東院庭園蛇行溝と毛越寺を例として、平安時代の曲水と遣水のそれぞれの性格を分析した。奈良時代の平城宮東院庭園における両蛇行溝ともには曲水流觴に用意されたとする、西蛇行溝の西側に礫敷広場があり、座る空間は広く作られていた。しかし、南蛇行溝は南面大垣と東西建物の間に挟まれており、流れに沿って座ることはむずかしいと見られていたため、晴れた日ならば、西蛇行溝を使って屋外で曲水流觴を行い、雨の日には、南蛇行溝を使って文人はこの建物の中に座り、曲水流觴を行っていたという結論にたどり着いた。

さらに、平安時代における遣水の手法に関して詳しく書かれていた作庭の教科書『作庭記』を取り上げ、これを根拠として、遣水が曲水流觴に利用されるものだということが分かった。発掘調査により、毛越寺の遣水も『作庭記』に沿って造られたものであった。昭和61年から、毛越寺における曲水流觴が再現された。毎年5月の第4日曜日に、男性は衣冠や狩衣、女性は桂、十二単など平安貴族さながらの盛装を身にまとして参宴する。筆者は、装束調度、浄土思想、和歌吟詠の三つの方面から分析し、毛越寺における曲水流觴の再現が相応の文化価値を持っていることを示した。曲水流觴により、伝統的な装束調度を次代に伝えることができるのみならず、日本人の美的感覚と宗教様相の融和調和する姿を体現し、浄土万代の至福思想も十分に発揮している。また、現在の短歌はその内容意味を理解させるだけで終わり、生き物の命の息吹や心を動

かす力を失ってきたことと比べると、和歌が文字を目で読まれるだけでなく、声に出して歌われることにより、その美しい力を取り戻すことができると考える。

日本における曲水流觴の特色という点、当初は祓禊から始まった宴会遊樂の方に変化する中国の曲水流觴と比べ、祓禊の要素はあまりなく、宴会遊樂として行われた場合がよくみられた。奈良時代に曲水流觴は年中行事、祭祀としての色彩が強いと位置づけられ、政治的な性格を持っていたが、平安時代に入ると、貴族の邸宅などでも盛んに行われるようになり、一種の教養試験となり、また遊樂としての性格が強まっていた。しかしながら、平安時代にも上巳の祓禊、三月三日の祓禊自体は存続していた。それは、曲水流觴とまったく切り離れられ、川や海など、家の外で行われた別の行事であった。つまり、日本における、元々川禊があったため、それも中国から伝入した曲水流觴の生地になったのであろう。以上から、日本における曲水流觴は中国から受容し、鮮やかな日本特色に変化したものであることがわかった。

第4章では、7世紀中頃、斉明朝に造営された明日香村の酒船石の性格を検討し、そして文字通りでの意味も分析し、この酒船石は曲水流觴を行うために造られた可能性が高いことを示した。しかしながら、古代中国における自然形水路より、切石流杯渠が主流である。曲水流觴は、中国から日本に伝わったが、現在まで日本における切石流杯渠のものは見つかっていない。斉明朝の酒船石が曲水流觴を行うために造営されたことが認められれば、これこそ日本ひいては東アジアにおける現存する最古の流杯石であることが、明らかになるはずである。

## 5.2 今後の課題

古代中国における主流である切石流杯渠は、日本に伝わっていると考えていたが、現在までに、日本における切石流杯渠の確実な例は一つも見つかっていない。奈良県高市郡明日香村大字岡の丘陵にある三本の放射状の溝を持つ酒船石という石造物は、日本における現存する最古の流杯石であろうかという疑問が残る。

また、現在日本における、多くの親水公園や親水住宅などが各地で設けられ



ているため、これらの親水空間の利用のために、新しい視点を加えて考えていくべきだと考えている。いまだ曲水流觴は、遣水遺構が発掘された僅かな庭園でしか行われていないが、それと親水公園や親水住宅などをよく結びつけ、時々イベントを行い、人々の生活に大きな楽しみを与えてみることも、おもしろい試みであろう。

今後はそれらについて、まず、新たな文献史料と発掘調査により、酒船石と切石流杯渠に関する研究を一層進めて行きたいと考えている。また、曲水流觴と親水空間の利用にも目を向け、課題にしたいと考えている。

## 謝辞

本論文の執筆において、まず指導教官の藪敏裕教授、劉海宇先生に大変お世話になりました。御多忙の折、丁寧かつ熱心なご指導を賜り、心より感謝しております。

それから、国語科の先生方には、専門的な分野において、ご教示にあずかり、心より厚く御礼を申し上げます。

また、院生室の皆様には、公私ともに本当にお世話になりました。同学年の皆様、先諸先輩方、すべての皆様に心から感謝いたします。皆様と共により勉強ができ、充実した生活を過ごすことができました。本当にありがとうございました。そして、今まで留学生生活を支えてくれた両親に深く感謝いたします。

最後に、院生室の皆様のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

## 参考文献

- (1) 三和総合研究所編、国土交通省土地・水資源局水資源部編集協力 『日本の水文化』 ミネルウァ書房 2001年 p 47
- (2) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I ―古墳時代以前～奈良時代―』 2006年 p 21
- (3) 奈良文化財研究所 「平成14年度研究会記録」 2003年 p 145－146
- (4) 奈良文化財研究所 「平成15年度古代庭園研究会」資料 ―奈良時代庭園遺構の検討― 2003年 p343－348
- (5) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I ―古墳時代以前～奈良時代―』 2006年 p 27
- (6) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I ―古墳時代以前～奈良時代―』 2006年 p 424－505
- (7) 奈良文化財研究所 「平成14年度古代庭園研究会」資料 ―飛鳥時代庭園遺構の検討― 2003年 p235－237
- (8) 高瀬要一 「中国・韓国に残る流杯渠遺構」 前掲書注[6] p 433－440, 512－519
- (9) 南越王宮博物館籌建処等 『南越宮苑遺址（上）』 文物出版社 2008年 p 76, 295
- (10) 楊鴻勳著 『宮殿考古通論』 紫禁城出版社 2001年 p303
- (11) 曹勁著 『先秦兩漢嶺南建築研究』 科学出版社 2009年 p 223
- (12) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I ―古墳時代以前～奈良時代―』 2006年 p 22
- (13) 房玄齡等 『晋書』 中華書局 1974年 p 671
- (14) 守屋美都雄 『荆楚歳時記』 平凡社 1978年 p 113－117
- (15) 李昉等編 『太平広記』 中華書局 1961年 p 1734
- (16) 李昉編 『太平御覧』 第2巻 河北教育出版社 1994年 p 668
- (17) 欧陽修 『集古代録跋尾』 卷六 台湾新文豊出版公司 1977年 p 17883
- (18) 張鷟 『朝野僉載』 卷三 商務印書館 1936年 p 38
- (19) 劉昫撰 『旧唐書』 卷七中宗本紀 1975年 p 149

- (20) 李昉編 『太平御覽』 卷一九四 河北教育出版社 1994年 p 1069
- (21) 『全唐詩』 中華書局 1960年 p 4347
- (22) 傅璇琮、周建國『李德裕文集校箋』 河北教育出版社 2000年 p 603
- (23) 李昉編 『太平御覽』 卷一七六 河北教育出版社 1994年 p986
- (24) 董誥等編 『全唐文』 中華書局 1983年 p3419
- (25) 『全唐詩』 四九九卷 中華書局 1960年 p5676
- (26) 馬端臨 『文獻通考』 中華書局 1986年 p494
- (27) 前掲書第五四冊 p34020
- (28) 李誠撰 『營造法式』 卷三 商務印書館 1933年 p 153
- (29) 李誠撰 『營造法式』 第29卷 商務印書館 1933年 図161
- (30) 関野貞 「西遊雜信」 『支那の建築と芸術』 岩波書店 1938年 p 576  
—677
- (31) 李文 「話説京都流杯亭」 『北京檔案』 1995年 p 43
- (32) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I —古墳時代以前～奈良時代—』  
2006年 p 24
- (33) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I —古墳時代以前～奈良時代—』  
2006年 p 441
- (34) 奈良文化財研究所 「平成15年古代庭園研究会」資料 —奈良時代庭園遺  
構の検討— 2003年 p343
- (35) 奈良文化財研究所 「平成15年古代庭園研究会」資料 —奈良時代庭園遺  
構の検討— 2003年 p344～345
- (36) 金子裕之編 『古代庭園の思想—神仙世界への憧憬』 株式会社角川書店  
2002年 p98
- (37) 金子裕之編 『古代庭園の思想—神仙世界への憧憬』 株式会社角川書店  
2002年 p100
- (38) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究 I —古墳時代以前～奈良時代—』  
2006年 p 28
- (39) 奈良文化財研究所 『平城宮発掘調査報告XV』 2003年 p16

- (40)奈良国立文化財研究科 『なら平城京展98』 1998 p 42
- (41)奈良文化財研究所 『古代庭園研究Ⅰ ―古墳時代以前～奈良時代―』  
2006年 p 26
- (42)太田清六 『寝殿造の研究』 吉川弘文館 1987年 p158
- (43)監修・斉藤忠一、田中昭三・『サライ』編集部編 『「日本庭園」の見方』  
株式会社小学館 2002年 p110
- (44)宮元健次 『歴史とを愉しむ日本庭園鑑賞のポイント55』 メイツ出版株  
式会社 2010年 p59
- (45)宮元健次 『歴史とを愉しむ日本庭園鑑賞のポイント55』 メイツ出版株  
式会社 2010年 p16
- (46)田村剛 『作庭記』 相模書房刊 1964年 p60
- (47)小埜雅章 『図解庭師が読みとく作庭記』 学芸出版社 p83
- (48)小埜雅章 『図解庭師が読みとく作庭記』 学芸出版社 p85
- (49)小埜雅章 『図解庭師が読みとく作庭記』 学芸出版社 p90
- (50)小埜雅章 『図解庭師が読みとく作庭記』 学芸出版社 p101
- (51)奈良文化財研究所『古代庭園研究Ⅰ ―古墳時代以前～奈良時代―』  
2006年 p 521
- (52) 奈良文化財研究所 『古代庭園研究Ⅰ ―古墳時代以前～奈良時代―』  
2006年 p 28
- (53)宮元健次 『歴史とを愉しむ日本庭園鑑賞のポイント55』 メイツ出版株  
式会社 2010年 p61
- (54)毛越寺発行 『毛越寺曲水の宴』改訂版 川嶋印刷 2005年 p2
- (55)毛越寺発行 『毛越寺曲水の宴』改訂版 川嶋印刷 2005年 p5-13
- (56)紀貫之 『古今和歌集』仮名序 角川学芸出版 2009年 p3
- (57)毛越寺発行 『毛越寺曲水の宴』改訂版 川嶋印刷 2005年 p46
- (58)相原嘉之 「酒船石遺跡」 明日香村委員会 2000年 p23
- (59)劉海宇 『酒船石小考―東アジア現存の最古の流杯石の検討』 岩手史学  
研究第九十六号抜刷 2015年 p35
- (60)劉海宇 『酒船石小考―東アジア現存の最古の流杯石の検討』 岩手史学

研究第九十六号抜刷 2015年 p33

(61) 劉海宇 『酒船石小考－東アジア現存の最古の流杯石の検討』 岩手史学

研究第九十六号抜刷 2015年 p34

(62) 劉海宇 『酒船石小考－東アジア現存の最古の流杯石の検討』 岩手史学

研究第九十六号抜刷 2015年 p35

(63) 相原嘉之 「酒船石遺跡」 明日香村委員会 2000年 p27

(64) 佐藤憲正 『日本国語大辞典第二版』第五卷 小学館 2001年 p1393